
勇者に女神の祝福を

芳野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者に女神の祝福を

【Nコード】

N6013W

【作者名】

芳野

【あらすじ】

魔王が勇者の手によりようやく倒された。大陸中が喜びに沸く中、片田舎に住む見習いシスターは一人悩んでいた。勇者に求婚されてしまったのだ。結婚などしたくはないが、相手が相手なだけに簡単には断れない。どうしたら断れるか悩んでいる彼女の下に、突然の知らせが舞い込む。同じ頃、流民の蜂起や魔王の復活といった不穏な噂も流れ始める。ただの見習いシスターだったはずの主人公にも嵐が近づいていた……

土日に更新予定。

1 勇者の凱旋と見習いシスターの憂鬱

「私と結婚していただけませんか」

金髪の男はひざまずいて、目の前に立っている愛しい女の手を取った。

女は啞然とした表情を浮かべ、困惑した。この体勢は第三代勇者の故事にちなんでいるとしか思えない。なんて質の悪い冗談なのだろうと、彼女はひざまづいた男の顔をまじまじと見つめた。しかし、男の端正な顔に浮かんだ表情は真剣そのものだった。

女は丈の長い質素なグレーのワンピースを身につけ、白い頭巾を被って髪を完全に隠すという修道女の服装をしていた。胸には見習いシスターの証であるペンダントを下げしており、その中心の魔石は勇者のまとう女神の祝福を受けて薄く光っている。その光を視界の端で確認し、女はマズいことになってしまったと冷や汗をかいた。

男の夕闇を溶かしたような藍色の瞳と視線が絡み、彼女は思わず目をそらした。

「アルフォンソ様、あの、私はシスターなのですが……」

絞るように、女は答えた。シスターは結婚できない。男も当然そのことは知っているはずだった。

「まだ、見習いでしょ。それに」

男は少し意地の悪い笑みを浮かべた。その表情に女は幼なじみだった少年の面影を見て、はっと息を飲んだ。

「シスターは女神、ひいては女神の代行者である勇者に仕えるのが仕事のはずですね」

女は何と答えたら良いか分からず、空を見上げた。二人のいる遺跡はいつの間にか夕日に包まれていた。夕暮れ時の空は赤く染まり、鳥の群れが南の森に向かって飛んでいた。

?? 親愛なる女神様、どうか私をこの苦境からお救い下さい。

彼女は心の中で祈るしかなかった。

「で、どうしたの？ リータ」

テーブルに身を乗り出し、瞳をキラキラと輝かせている友人に、リータと呼ばれた修道服姿の女はうんざりとした表情を浮かべた。

「……また来るから、その時までには覚悟を固めておいて、と言われただわ……」

「ああ、すごいわ、リータ！ まさかあなたが勇者様と結婚だなんて！」

興奮する友人に、リータはムツとした表情で叫んだ。

「ちよつと、誰かに聞かれたらどうするのよ！ 大体私結婚なんてしないわ！ テレーザ、分かっているでしょ」

「人払いはあるから大丈夫……でも、いいお話だと思うわ。素敵じゃない？ 第九代勇者ゆかりの地で、第三代勇者の伝説にちなんだプロポーズ。これでときめかなきゃ女じゃないわ」

テレーザは頬を染め、うっとりとした表情を浮かべている。それはいかにもロマンチストのテレーザらしい反応で、彼女の美しい顔によく似合った表情だった。リータは頭巾を被った頭を押さえた。

「知ってるでしょ。私はシスターになって医学を学びたいの。結婚したらシスターになれないじゃない！」

「いいじゃない、相手は容姿端麗で家柄も良いし、しかも勇者よ。最高じゃない。もう働かなくても大丈夫よ」

「そうじゃない！ 私は父さんみたいな医者になりたいの。勇者の嫁なんて冗談じゃない！」

リータはテーブルを打って力説した。この国では女が医学を習いたいと思う場合、シスターとなって教会の付属病院で働く以外に道はない。国軍の士官学校にも医学の課程は存在するが、基本的に女子の入学は許されていないかった。

「はいはい。まあ、リータは昔からそういう子よね」

優雅に紅茶を飲みつつ、テレエザは苦笑して言った。彼女の鮮やかな青い瞳に、困ったような色が浮かぶ。二人は子供の時から親友だ。テレエザはリータがシスター見習いになった理由も、結婚したがない理由もよく知っている。多少茶化してはみたが、リータが本気で困っているのをテレエザは知っていた。

「……大体、あの人は本当にあのアルなの？」

多少落ち着いたリータはテレーズに尋ねた。この疑問こそ、彼女が忙しい合間を縫ってテレーズを尋ねた理由だった。

「父様に確認したけど本当よ。名前も違うから、私もパーティで聞いてビックリしたの。まさかあのアルが勇者になって帰ってくるなんてね」

テレーズは考え込むように目を伏せた。

十年ほど前、この地方の領主であるテレーズの父が一人の少年を連れてきた。少年の名はアルフレードといい、二人より一つ年上だった。テレーズの母方の親戚の子で、戦火を避けるため王都から疎開してきたという。彼はテレーズの家と一緒に暮らすこととなった。医師であつたリータの父とテレーズの父は友人で、同じ年に生まれたリータとテレーズは姉妹のように育つた。二人はとても仲が良く、いつも一緒に遊んでいた。

また、リータはテレーズの『学友』だった。テレーズの一人で勉強するのは嫌という駄々に、領主はリータを学友とすることで応えたのだつた。これはリータにとつて、とてつもない幸運だった。彼女は歴史などの座学に高い才能を認められた。それがあまり面白くなかつたテレーズも熱心に課題に取り組むようになり、二人は競うように知識を詰め込んだ。

少年がやって来たのはそんな時期だった。当然のように彼も二人と一緒に勉強するようになった。少年は素晴らしく聡明で、知識量も彼女たちを遙かに凌駕していた。時には家庭教師と論戦を交わし、

二人を唾然とさせた。二人は彼に追いつこうと日々勉強し、本を読みふけたが、結局彼にはかなわなかった。

しかし、ませているとはいえ所詮は年端のいかない少年で、相応に子供らしいところもあった。三人はそのうち親しくなつて、時折村や周辺の森を一緒に探検するようになった。

「アルつて、あんまり腕っ節の強いタイプではなかったよね」

少年を思い出し、テレーズが言った。子供の頃の彼は、後に勇者になるとは到底思えないような大人しい少年だった。

「そう。いつも本を読んでいた。仲良くなつてからは一緒に外で遊ぶこともあつたけどね」

リータもうなずく。

「いたずらして、泣かせたこともあつたよね」

リータの言葉に、あつたあつたとテレーザも笑う。

ある時二人は、森の中に彼を一人わざと放置するといつた。それを決行した。二人は彼が困っている様子を離れたところから観察した。今思えば悪趣味で、危険ないたずらだった。彼は二人の名を呼びながら森をさまよい歩き、やがて泣き出してしまった。仕方なくリータが飛び出して行くと、彼は安堵して泣きながら満面の笑みを浮かべた。リータはその表情にとつてもない罪悪感を感じたのだ。た。

テレーザには、アルフレード少年と勇者アルフォンソの印象がどうしても一致しなかった。自説を展開する時の自信に溢れた顔も、森の中で怯えていた顔も、先日村に訪れた第十四代目勇者と重ね合わせる事ができなかった。リータにしても似たようなもので、プロポーズ時に一瞬浮かんだ表情に、相手の言葉尻を捕らえてニヤリと笑う少年の面影がわずかに重なつただけだった。

「そつえば、勇者様つて王女殿下と結婚するんじゃないの？」
テレーザの言葉に、リータは同僚や村人の娘らがキヤーキヤーと

騒いでいたのを思い出した。勇者と王女の恋物語。それは伝説の第三代勇者のロマンチックな物語を彷彿とさせ、国中の少女達の格好の噂話になっていた。

「ガンディー二公の息女って噂も聞いたわ」

王女以外にも、多くの女性が勇者に熱い視線を送っていた。勇者は誰を選ぶのか。こんな田舎にも噂が届くほど、その行方に国中が注目していた。

だからこそ余計に、今回のプロポーズは彼女たちを困惑させた。

王女や有力者の娘との話が出ているのに、なぜ勇者はリータにプロポーズをしたのだろうか？

「どういづつもりなのかしらね。過去の例を考えれば、どう考えたって王女様と結婚した方が良いと思うんだけど」

テレエザの言葉に、リータはため息をついた。

「そうなのよ。大体、勇者は国王になれないと幸せになれないし、人並みに生きることでもできないって言ったのはアル自身なのにね」
リータはポツリと呟いた。彼女は胸に去来する苦い思いをかき消そうと、残った紅茶を飲み干した。

かつて少年が主張していたことも、彼女らの疑問を大きくしていた。彼は言っていたからだ。『勇者の運命は国王になるか、歴史から消えるか、どちらかしかない』と。それに則れば、勇者となった彼は王女と結婚して次期国王となるべきだった。二人の脳裏には、勇者を称える家庭教師にムキになって反論するアルの思い出が浮かんでいた。

「あれだけ勇者を否定するようなことばかり言っておいて、何で勇者になるうと思っただらうね……」

テレエザが言った。

「本当よね。言い方は悪いけど、勇者じゃなければこんなに面倒なことにはならないのに」

リータはお茶請けのクッキーをつまみ、頬張った。バターの香ば

しい香りと甘みに、彼女は癒される思いがした。

「見習いとはいえ、シスターは勇者に命令されたら断れないものね……」

テレーザの呟きに、リータは深くため息をついた。おかわりの紅茶を注ぎながら、リータはうんざりした気持ちを含めて言った。

「問題はそこよね。ただのアルなら、いくら將軍家嫡男とは言え、無理矢理シスターを連れ去ることもできないし」

女神に生涯を捧げたシスターの地位は、この国ではかなり高い。一度正式なシスターとなつた女を無理矢理俗世に戻そうとすれば、国王ですら批判を免れない。翌年に予定していた誓願式を早めてもらい、見習いから正式なシスターになつてしまえば、もうどんな男からの求婚も受け付けることはできない。??ただし、勇者を除いて。

勇者とは創世の女神の遺した剣をふるい、女神に代わつて魔王を討つ、女神の代行者とされている。故に、女神に仕えるシスターは女神の代行者である勇者にも女神と同じく仕えなければならない。見習いとはいえシスターであるリータは、勇者の望みに応える義務を負っている。過去にも、勇者によつて命を救われ、後に乞われて結婚したというケースがあつた。

「……思い切つてシスターを辞めたら?」

「それじゃあ本末転倒よ。私はシスターとして医学を勉強したいの」
「でも、結婚なんてしたくないでしょ?」

テレーザの質問に、リータは困つた顔で返答した。

「……シスター辞めて、諦めてくれると思う?」

「むしろ、自分と結婚するために辞めたと思われるわね……そして、父様に無理矢理差し出されるのがオチでしょうね」

リータを守ってくれる人はいない。彼女の両親はとうに死んでいる。テレーザもできるだけ力になりたいとは思つが、相手は將軍家、

しかも勇者だ。領主である彼女の父は喜んでリータを差し出すだろう。もちろん、それが彼女の幸せと信じて。

「どうやって断ったらいいんだろう……」

「……」

結局の所、テレーザにも良いアイデアなどないのだった。二人は押し黙った。

「……結婚も、悪くはないわよ？」

沈黙に耐えきれず口を開いたテレーザは、いたずらっぽい笑みを浮かべた。彼女は一年前に初恋の人と結婚したばかりだった。

「やめて」

リータははつきり言うのと、頬杖をついてふいつと顔を背けた。ごめんごめんと、テレーザが笑った。

「私じゃなくて、テレーザなら分かるのに」

リータは友人を見つめて言った。テレーザは子供の頃から可愛らしく、成長した後は村一番の美人と言われていた。実際、リータもそう思っていた。夏空のように青い瞳は長いまつげで縁取られ、鼻筋の通った顔は彫像のように整っていた。ゆるくウェーブのかかった亜麻色の髪は、彼女のシミ一つない白い肌を引き立てていた。テレーザの容姿は、リータの憧れでもあった。彼女は美しい友人の側にいられることを、内心誇りに思っていた。

リータは愛嬌があつて可愛いとは言われても、美人とは言われたことがない。彼女は自分がテレーザの引き立て役であることは子供の頃から分かつており、むしろ喜んでその役を引き受けていた。

「なにそれ。私もう結婚してるのよ」

テレーザが笑う。ウェディングドレス姿のテレーザは綺麗だったと、リータは結婚式の様子を思い出した。

「だってテレーザは綺麗だし。彼が私を好きになる理由が分からないのよ」

私の髪はこんなだし……と心中で付け足し、リータは少し寂しげに笑った。彼女の笑みの意味に、テレーザは気づいた。

「リータは可愛いわ。私が男なら、あなたをシスターになんてさせなかった」

テレーザはにっこりと笑った。つられてリータも笑う。

「アルに見る目があるのは確かね。迷信を気にしないのもプラス十点」

「今回に限って言えば、気にして欲しかったなあ」

リータは空を見上げた。空には雲一つなく、穏やかな春の日差しが緑に包まれた庭園を照らしていた。

「本当、どうしたらいいのかしらね……」

テレーザの呟きに続いた二人のため息は、人気のない静かな庭に消えていった。

勤務交代の時間が近くなり、リータはテレーザの家を辞して教会に戻った。帰り際、リータはテレーザに、この一件は領主にも彼女の夫にも口外しないよう釘を刺した。友人が軽々しく話すタイプでないを知ってはいたものの、内容が内容であるため、彼女はこのことが誰かに知られることは極力避けたかった。

自室で簡単に身支度を調べると、リータは教会付属の病院へと急いだ。病院に入ると、この教会の司教であるシスターソニアが迎えた。

「おかえりなさい」

ソニアの低く優しい声に、リータは微笑んで応えた。

「ただいま戻りました。遅くなって申し訳ありません」

「こちらなら大丈夫。今は病人も少ないし、最近は魔物に襲われる人も減りましたしね」

ソニアの微笑みに、リータは心安らぐのを感じた。

リータはシスターソニアを尊敬していた。彼女はどんな時でも微笑みを絶やさず、どんなひどい病人や怪我人でも最後まで諦めずに心から看病を行った。また、医術や看護の技術も高く、医師を目指

すリータにとっては良き師でもあった。ソニアの方も勉学に励み、病人の看護を熱心に勤めるリータを高く評価していた。ソニアはリータが正式なシスターになった暁には、王都にある大教会の病院で研修できるよう手配する心づもりだった。

「本当に、勇者様のおかげで平和になりましたね」

横からリータの同僚であるマリーナが言った。本当ね、とソニアが答えた。二人は楽しみに、この間村を訪れた勇者の話始めた。

ソニアもマリーナも、リータの事情については何も知らない。リータの気持ちを知らない二人は、勇者を褒め称えている。マリーナに至っては頬を染めて、勇者の名をうっとりと言っていた。人の気も知らないで、リータは引き継ぎのノートの確認しながら頭の片隅で毒づいた。

この件について、できるなら教会の誰にも知られずに事態を収集したいとリータは思っていた。シスターソニアには相談したかったが、彼女がどう答えるかはリータには分かっていた。シスターが、勇者に背けと言うはずなどなかった。

彼女の背後では患者も加わり、女性達の勇者談義に花が咲いていた。その楽しそうな笑い声を聞きながら、リータは暗く重い気分になんとか耐えていた。

それから一週間が過ぎた。リータはこの間の勇者との一件が誰かに漏れていないか、村人や患者の噂に耳をそばだてていた。テレエザが秘密をばらすことはあり得ないとは思っていたが、あのシーンを誰かに見られていた可能性や、二人の会話を聞かれた可能性も除外はできなかった。そのため、リータはいつもはあまり加わらない井戸端会議にもそれとなく参加していた。

村はずれの水場で、集まった女達は水仕事をしながら楽しげに話していた。村人の話題は未だに勇者や国王のことが多かった。特に、娘達は相変わらず勇者のことばかり話していた。そもそも刺激の少ない村である。彼女らの反応はもっともだった。

この一週間で、勇者に関して様々な噂が多数流れていることをリータは知った。それは勇者の片腕である騎士もミステリアスで都で密かに人気だとか、魔王討伐に同行した女騎士が今度結婚するとかそんなたわいのないことから、勇者は実は前国王の隠し子だという不穏な噂まで、様々であった。

幸いなことに、リータと勇者の一件は、まだ誰にも知られていないようだった。リータはそのことに安堵し、密かにその場を離れようとした。

その時だった。マリーナが何か叫びながら走ってきた。女たちの視線が彼女に集中した。走ってきたマリーナは手に何やら握り、息を切らせていた。

「どうしたの？」

娘の一人が声をかけた。マリーナは息を整えると叫んだ。

「これ見て！」

彼女はそう言うと、持っていた紙を開いた。それは町から届いたばかりの瓦版だった。

「勇者様が、亡くなられたって！」

広げられた瓦版には、大きな文字で『勇者、死す！』と書かれていた。

2 突然の訃報と思い出の遺跡

『勇者アルフォンソ様、死去』

……昨日夕刻から行われていた晩餐会の最中、王城内に突如として魔物が来襲した。晩餐会は王の私的な催しで、勇者とその父である将軍ブルーノ公、及び大臣ガンディーノ公が招かれていた。勇者は果敢に応戦し、撃退することに成功した。しかし、不意を突かれただため重傷を負い、一日後に死亡が確認された。また、この戦闘の際、ブルーノ公とガンディーノ公も巻き込まれて死亡した。幸いなことに、国王陛下には怪我はなかった。国王陛下はこの不幸を悼み、三人の国葬を執り行うと発表した。また、バルディ王国全国民に対し、各教会で執り行う三人の追悼の儀に参加するよう呼びかけた……

突然の訃報を聞いてから三日。リータは連日届く勇者の訃報と関連記事を幾度となく読み返した。

アルが死んだ。この事実は彼女を混乱させた。彼のプロポーズをどう断るか悩んでいたリータにとって、このことは朗報と言っても良い。しかし同時に、女神に仕える身として、また何よりも幼なじみとして、純粹に彼の死を悲しむ気持ちもあるのだった。彼女はこの感情をどう表現したらよいか分からなかった。

「どうしたの？ 暗い顔しちゃって？」

掲示板を見つめて物思いにふけるリータに、マリーナが話しかけてきた。

「勇者様が亡くなったのが残念で……」

リータはシスターとして無難な答えを言った。しかし、マリーナはニヤツと笑った。

「いいの、いいの、分かってる」

マリーナは全て分かっているという風にならずいた。リータは訳

も分ならず同僚を見つめた。

「勇者様のこと好きだったんでしょ」

マリーナの唐突な言葉に、リータは一瞬ヒヤリとした。慰めるように言葉を続ける同僚に、彼女は曖昧に笑った。マリーナは十七歳とリータより一つ若かったが、若い女らしく恋愛の話が大好きだ。村の誰それが付き合ってもうすぐ結婚するだの、三角関係がどうしたのだのと、放っておけば一日中でも喋っている。一体どこから仕入れたんだらうとリータが不思議に思うほど、村の人間関係に精通していた。

当然、勇者の話にも詳しくかったので、リータは何度かマリーナにそれとなく勇者の話聞いた。

「あなたが男に興味を持つなんて初めてだったしね。勇者様の話を聞くために、普段は参加しない噂話にもこっそり加わっていたし」
何でこんなことにはかり鋭いんだ！ リータは内心ため息をついた。

「格好良かったもんね……リサヤアナも結構落ち込んだのよ」

マリーナは大げさにため息をついた。マリーナはリータの暗い顔を、他の娘達と同じく、亡くなった勇者への淡い憧れと哀悼の意と解釈したようだった。彼女は誤解をあえて解こうとは思わなかった。
「ね、そろそろお昼よ。今のうちにご飯食べよう」

リータは話を続けたくなくて、話題を変えた。マリーナは少し物足りなさそうだったが、リータに賛同し、二人は共に教会内の食堂へ向かった。

昼食の間も、マリーナは勇者の話が続けたそうだった。面倒だったので、リータはマリーナ自身の恋について水を向けた。マリーナは嬉しそうに、今気になっているという男の話をし出した。それは少し前、足に怪我を負って担ぎ込まれてきた青年だった。彼はもう退院していて、最近マリーナにデートの誘いや贈り物をしているらしい。頬を染めるマリーナを、リータはほほえましい気分で眺めていた。

マリナーはリータと同じく見習いシスターであるが、彼女は行儀見習いとして来ているだけだった。彼女の出身は教会のある村からは少し離れた町で、彼女はそれなりに裕福な商人の娘だった。

教会での奉仕活動は女子のたしなみとされており、お見合いや結婚にもプラスに影響する。マリナーのように教会で恋の相手を見つめることも多々ある。見習いシスターは必ずしも正式なシスターにならなくても良く、正式なシスターになるのは見習いのうち一割程度だった。ほとんどは結婚して教会を去っていくが、彼女らは教会の貴重な労働力だった。リータのいる教会にも全部で五人の見習いシスターがいるが、正式なシスターになるのは恐らくリータだけだろう。

正式なシスターとなれば、その出自に関わらず尊敬され、最低限の生活は保証される。しかしそれは、彼女らの自己犠牲にも近い献身に対する対価とも言える。シスターとなった女は生涯を女神に捧げなければならない。当然、結婚はできないし、俗世に戻ることも許されてはいない。戒律を犯した場合は、死を持って償わなければならない。また、昼夜を問わず奉仕活動を行うことが求められる。各地の教会には病院、孤児院、学校などの福祉施設が存在し、シスターはそれぞれの適性によって各施設に配置される。

また、シスターには高い教養、知識、技術が要求される。日々研鑽を積み、己の知識、技術を磨かなければならない。正式なシスターになりたいと願う少女は多いが、その多くが厳しい世界であることを身をもって知り、教会を去っていくのだった。

昼食後、マリナーは持ち場へと戻った。リータの仕事は夕方からで、数時間休みとなっていた。彼女は薬草を採りに行くと同僚に告げ、森へと足を向けた。遺跡へと続く森の小道を進みながら、彼女はあの日のことを思い出していた。

??二週間前。彼女の住むセラの村は、突然の勇者の来訪に沸いていた。魔王の脅威から大陸を救った救国の英雄が地味な田舎村に突然現れたのだ。聞けば、勇者は昔この村に世話になったことがあり、どうしても挨拶に来たかったのだそうだ。来訪は一応あらかじめ領主であるテレーザの父に連絡されていた。しかし、それも突然のことだったので、領主は急遽村を挙げての歓迎式典を用意した。

正直なところ、彼女は周囲ほど勇者に興味はなかった。勇者が教会を表敬訪問した時、リータは勇者を間近で見る機会を得ていた。勇者は背こそ高いが、彼女が想像していたほどがっちりとした体型ではなかった。しかし、そのきびきびとした動作は軍人らしく鍛え上げられたもので、袖からのぞく腕はとても逞しかった。顔も男にしておくにはもつたないほど整っており、常に微笑みをたたえていた。輝くような金色の髪をなびかせ、青い目には理知的な光が宿っていた。そして、腰には美しく輝く女神の剣を帯びていた。

本当に絵に描いたような勇者っぷりだなと、比較的冷めたリータですら思った。教会の中で、リータは一瞬だけ勇者と目が合った。彼女がにっこりと笑って応じると、彼もうつすらと笑った気がした。彼女は噂の勇者を見られて満足し、式典には参加しなかった。

しばらく森の中を進むと、少し開けた場所に出た。薄暗い森の中から明るい場所に急に出たので、リータは日差しに目を細めた。

その空き地には、焼けた後のある古い石組みと建物の基礎部分が残っていた。それは三百年ほど前に壊され焼けた古い教会の跡地だった。教会が現在の場所に再建された後、黒い森にほど近いこの場所は放置された。村人はそれを遺跡と呼び、子供達の遊び場となっていた。リータ達も幼い頃は何度もこの場所で遊んだものだった。

この遺跡にはある言い伝えがあった。かつて、この国は魔王に追い詰められて滅亡の危機にあった。それを救ったのが第九代勇者であり、彼は仲間や国中から集めた勇士達と共に壮絶な戦いを繰り広げ、ついに魔王を倒し、祖国を守った。しかし、その際に深手を負

つてしまい、その怪我に苦しんだ挙げ句に死んでしまった。多くの
人々が彼の死を悲しみ、以降、彼は悲劇の勇者と言われるようにな
った。

この遺跡に残るのは、その九代目勇者の伝説であった。彼は魔王
との戦いの最中、一度この地方を訪れている。その時、この遺跡の
場所で勇者はある娘と恋に落ちた。娘は勇者に付き従い、その後の
苦しい戦いを共に戦ったのだという。しかし戦後、二人の仲は勇者
の父である当時の国王によって引き裂かれてしまう。傷心の少女は
この地方に戻り、いつか会いに行くという勇者の言葉を待って、毎
日この遺跡を訪れた。勇者が亡くなった日、彼の魂は光となってこ
の遺跡に落ちてきた。そして、娘の手を取り、黒い森へと消えたとい
う。

勇者列伝には娘の存在もこの伝承も書かれてはいない。しかし、
セラの村人はこれを真実と思い、語り継いできた。リータも幼い頃、
この話を母から聞いた。

王国の南は、黒い森と呼ばれる大森林地帯となっている。遺跡は
森の入り口でもあった。一般に、黒い森は危険な場所と認識されて
いる。しかし、彼女の村では木材の入手や狩り、薬草の採取などの
ために、森へ入ることは当たり前のことだった。ルールを守り慎重
に行動すれば、この森はそれほど危険ではない。リータも医師であ
る父や薬師だった母と共に、幼い頃からこの森に入りに入っていた。
森は彼女の庭のような者で、薬草の生えている場所はおおよそ把握
していた。

必要な分量を採取し終え、リータは一息つくために遺跡まで戻っ
た。薬草の入った籠を地面に置き、彼女は石組みに軽く腰掛けた。
空は明るく晴れていて、時折小さな雲が名ゆつくりと横切っていく。
新緑の匂いを運ぶ風に吹かれてぼんやりと物思いにふけていたり
リータは、自然とあの日のことを思い出していた。

二週間前、勇者歓迎式典の翌日のことだった。日が沈む少し前、教会の薬草畑で一人水をまいていたリータの所に、巡礼用のフードを被った男が近づいてきた。男は彼女に挨拶すると、周りに誰もいないことを注意深く確認した。リータは少し警戒したが、フードを脱いだ男の顔に仰天した。それはまぎれもなく、勇者その人であった。驚いてシスターソニアを呼ぼうとした彼女を制し、彼は遺跡まで案内して欲しいとだけ短く告げた。

森の小道を歩きながら、勇者は彼女と目を合わせなかった。彼女が自己紹介しても、勇者はなぜか不機嫌そうに返事をしただけで、リータはかすかに不安を覚えた。ぎこちない空気を何とかしようとして彼女は勇者にどこで遺跡のことを知ったのか尋ねた。しばし黙っていた勇者だったが、やがて領主に聞いたという短い返事を返した。彼女は他にもいくつかのことを尋ねてみた。いつ頃この村にいたのかなど聞いてみても、勇者は短く返事を返すだけで会話は途切れがちだった。しかも、彼はますますイライラしているように見えた。リータは自分が勇者に何か失礼をしているのではないかと、気分を害すようなことを言ってしまったのではないかと思いついた。いつの間にか重い沈黙が二人を包み、リータはキリキリと痛む胃を押さえて、早足で遺跡へと向かった。

遺跡へとたどり着いた勇者は、しばし周囲を眺めていた。リータは少し離れてその様子を見ていたが、早く帰りたくてたまらなかつた。やがて勇者は彼女に向き直った。近づいてくる男に、彼女は何とか微笑みを絶やさずに相対した。

勇者はリータのすぐ近くまでやってくると、彼女をじつと見下ろした。男はリータより頭一つ背が高く、彼女は奇妙な圧迫感に襲われた。リータは後ずさり、逃げたいのを必死にこらえ、声を絞り出した。

「あの、勇者様、私に何か？」

リータの言葉に、男は押し黙ったままだった。リータをじっと見つめるその目に、彼女は内心怯えていた。

突然、勇者が口を開いた。

「私のこと、覚えていませんか？」

その言葉をリータはすぐに理解できなかった。戸惑うように視線を落としたリータに、男はふっとため息をついた。

「私はアルフレードです。……覚えていませんか？ リータ」

突然名前を呼ばれ、彼女の頭の中で幼い頃に共に遊んだ少年の顔が浮かんだ。

「アルフレード……アル？」

リータは驚いて顔を上げた。勇者は彼女の反応に、一瞬嬉しそうな顔をした。リータは記憶にある少年の顔と目の前の男を比較した。少年も確かに同じような金色の髪と藍色の目を持っていた。しかし、こんな顔だっただろうか？ 彼女には二人が同一人物である確証は持てなかった。リータは判断がつかず、困惑したまま彼を見つめた。

「……やっぱり、分かりませんか……」

リータの反応に、男はがっかりしたような顔して肩を落とした。

「……」

斜め上を見てふっと皮肉な笑みを浮かべている男に、リータは戸惑いつつ、利発だった幼なじみの少年の影を見たような気がした。

「……昔、この森で君とテレザと遊んだ帰り、私はははぐれて迷子になりました。困っていた私をリータが見つ付けてくれました。……」

「覚えていませんか？」

そんなことあっただろうか？ リータは少し考えていたが、一つ思い当たることがあった。

「あ……もしかして、川遊びの帰りの？」

まだ少年がこの村に来て日が浅い時だったか、リータとテレザは彼を森の中にわざと一人で放置したことがあった。彼は森の中の木々や花、動物が物珍しいのか、いちいち興味を示し、立ち止まっ

ては眺めていた。行こうと言っても中々動いてくれない彼にイラつた二人は、彼を一人放置し、その様子を楽しむことにした。結果彼は泣き出してしまった。バツが悪くなった二人は、それがいたずらであることをごまかすため、先にリータが出て行き続いてテレーザを呼ぶという小芝居をした。幸い少年はそれがいたずらだとは気づかなかったようだが、少年の笑顔に二人はとても気まずい思いをしたのだった。

「そう、それです！ その時教えてくれたでしょう。ここの伝説を……」

嬉しそうに語る男に、かつて感じた罪悪感がぶり返した。今更いたずらだったとも言えず、リータは笑顔でごまかした。この人は確かにアルかもしれないと思った。

「アルが勇者様……」

リータの呟きに、勇者が反応した。

「そう、私は勇者になりました。それで、リータ、話があります」
微笑む勇者と目が合い、さすがのリータも顔を赤らめた。照れくささに目をそらすと、勇者は彼女の手を取って、ひざまずいた。

何事かと身を固くしたリータに、彼は思いもかけないことを告げた。

私と結婚して欲しいと??

思い返しても、リータにはアルの気持ちが多分ならなかった。勇者が村を去る前にもう一度話をしようかと思っただけ、彼はプロポーズの翌日には既に旅立った後だった。

彼女が最後にアルと会ったのは八年前、彼が村を出て行く時のことだ。士官学校へ入るといって彼を、リータはテレーザと二人、いつまでも見送った。彼は確かに仲の良い友人だった。しかし、それ以上のもので断じてなかったとリータは思う。テレーザも同じ見解だった。

もし彼が幼い日のリータを好いていたとして、勇者となった今、

彼女にこだわる必要もあるまい。噂の王女は美しく聡明という評判で、地位からしても勇者にとってまさに相応しい相手だろう。

なぜ私なのだろう？ リータはあの日からずっと考えていた。

しかし、勇者は死んだ。彼のプロポーズのことはリータとテレザしか知らない。この問題は彼の死によって解決した。あの時彼女は混乱して、ろくに話すことさえ出来なかった。もつと話しておけば良かった。彼女は今になってそのことを後悔していた。

長いこと物思いにふけていたリータだったが、日が陰ってきたのに気づき、教会へと戻ることにした。遺跡を背に歩き出したリータはふと立ち止まって振り返り、遺跡に向かって祈りを捧げた。

3 不穏な予兆と惨劇の始まり

リータが教会に戻る道を歩いていると、村の方から女が一人走ってきた。それは病院を手伝ってくれている村の女性だった。女はリータを見つけると駈け寄ってきて、狩人が魔獣に襲われたと告げた。手伝いが必要なので、すぐに戻るよう彼女を呼びに来たという。二人は走って教会に戻った。

魔王が倒れたのに、どうして魔物が出るの？ 彼女は混乱しつつ、手を洗いう着替えた。

手早く身支度をしたリータが診療室に入ると、猟師らしい数人の男が血まみれの男を押さえているところだった。男の全身には切り裂かれたような傷が付き、左足と右手にはかなりの深手を負っていた。彼はどうやら錯乱しているようで、大人しく治療を受けられる状態ではなさそうだった。辺りに血が飛び散り、診察室は凄惨な様相を呈していた。リータは先に来ていたマリーナを手伝い、治療に必要な道具や薬を準備した。

押さえつけられた男の傍らで、シスターソニアが呪文を唱えていた。彼女の祈りに反応するように、ソニアの首から下がるシスターの証が淡い光を帯びて輝いている。

「mgc ANSTHS omds」

ソニアは苦しむ男の頭にそっと触れた。するとたちまち男の体から力が抜け、大人しくなった。しばらくすると男は軽い寝息を立て始め、完全に眠ってしまった。先ほどまで暴れていたのが嘘のようだ。その様子に、部屋中の人間が息を飲んだ。

「next」

静かに祈りを終わると、ソニアのペンダントから光が消えた。シスターソニアは暴れる男を押さえていた男達に感謝の言葉を述べ、彼らに治療室から出るように指示した。男達はシスターに男のこと

を頼み、出て行った。部屋に残った三人は、男の治療を始めた。

男の怪我は幸いにも命に別状はなかった。ただ、足の怪我は深く、しばらくは歩けないだろうというのがソニアの見立てであった。また、魔物による呪いもかなり強く受けているようだった。先ほどの異常な錯乱は、呪いのためでもあったのだろう。リータとマリーナが傷を手当てする一方で、シスターソニアはもう一度呪文を唱え、彼にかかった呪いを払った。

「魔獣が出たんですか？」

リータは男の足に包帯を巻きながら聞いた。かなり時間はかかったが、男の手当はほぼ終わっていた。

「黒い森で狩りをしているところを襲われたそうよ。悲鳴を聞きつけた仲間が何とか追い払って、彼をここまで連れてきたの」

腕の包帯を巻きながら、シスターソニアが答えた。その目にはやはり困惑の色が浮かんでいた。

「魔王は勇者によって倒されたのでしょうか？ 一体なぜ……」

止血に使ったガーゼや器具を処理しながら、マリーナが言う。

魔獣は魔王の魔力に影響され、凶暴化した獣のことだ。魔王であった隣国カルムの王、ダーヴィドが倒れた以上、魔獣が現れるのはおかしい。

「それが、最近また魔獣があらわれるようになったようなの」

ソニアの言葉に、二人もまた困惑した。それは、魔王が復活した可能性を示していた。しかも、以前よりも近くで。

リータの住むセラの村はバルディ王国の南部、黒い森のほど近くにある農業と牧畜を中心とした田舎の村だ。バルディ王国は大陸の東半分を治める大国である。王国は大陸を二分する大河テレー川を挟んで西側にある隣国、カルムと長らく戦争状態にあった。しかし、国境からも王都バラハからも遠く離れたセラの村は平穏で、戦時とは思えないほど平和な状態にあった。魔王が出現するまでは。

五年ほど前から兆候はあった。獣が凶暴化し、作物の不作が続いていた。国と女神教会は否定したものの、人々は魔王が現れたのだと密かに噂していた。

この大陸には時折、『魔王』が現れる。魔王が現れると、作物は取れなくなり、人や獣は魔性のものに变化すると言われている。そのうち国境地帯では魔物や魔獣が跋扈し出した。やがてセラの村でも魔獣に襲われたり、作物の収量が減ったりといった影響が現れ始めた。

そして、一年前、ついに女神教会は魔王が現れたことを認めた。教会が名指しした魔王はカルム王ダーヴィド。女神教会はダーヴィドを大陸に住む全ての人々の敵と認定し、勇者の出現を預言した。そして、それから半年、待望の勇者が現れた。それが將軍ブルーノ公の嫡子であるアルフォンソだった。

「まさか魔王が？ 勇者様は亡くなってしまったのに……」
不安そうなマリーナの言葉をたしなめるように、シスターソニアは強い口調で言った。

「女神のしもべたるシスターがそのようなことを言うてはいけません」

「ですが……」

「私たちが不安だと思っていれば、村人もそれを感じます。いついかなる時も女神の祝福を伝えるのが私たちシスターの役目なのです。それなのに皆と一緒にあって、それどころか皆を率先して妄想の魔王を恐れてどうするのですか」

シスターソニアの毅然とした言葉に、マリーナは視線を落とした。ソニアは顔に微笑を浮かべ、言葉が続けた。

「長い戦争がようやく終わったけれど、まだ皆気が立っているのですよ。戦いは終わりましたが、真の平和が訪れるのにはまだ時間がかかります。戦争で傷ついた人々の心を癒し、導くのもまた私たちの役目なのですよ」

ソニアはにっこりと微笑み、不安げな二人の見習シスターに告げた。

「まずは、この方を治してあげましょう」

診療台で眠っている男を指す上司に、二人は笑顔で応えた。

治療を終えて患者の仲間や家族に状況を説明し終わると、既に日は傾き夜になっていた。引き続き夜の勤務に入ったリータが病院内の見回りなどを一通り終え、ようやく一息ついたのは、夜も更けた頃だった。

リータは次の交代要員である見習い仲間フィオナと共に、病院の一室で軽食を食べていた。リータが夕方の魔獣襲撃の話をする、フィオナが会報にも似た事例があったと教えてくれた。

フィオナに引き継ぎ事項の確認をし終えたリータは、部屋の片隅に置かれていた教会の会報を手にとった。教会には独自のネットワークがあり、各地の教会で起こった重要事項や王都の教会本部からの連絡を伝えるのがこの会報だった。

この数日、彼女は勇者関連の記事しか読んでいなかった。他の記事にも目をやると、確かに魔獣による被害報告が二つほど見つかった。時期的には勇者逝去の前後であり、前魔王によって生じた魔獣の生き残りとも考えられる。しかし、魔王が倒されたからこの一月、魔獣による被害が激減し、その前の週には報告がなかったことを考えると、これはやや異常な事態と言えた。

フィオナが見回りに行ってしまった後も、リータは会報を読み続けた。

その中に、国の南部では流民の暴動があったという気になる記事があった。魔王による被害はバルディよりカルムの方がひどかった。魔物、魔獣の被害も多く、耕作もままならなくなった多くのカルム国民が流民となり、バルディに流れ込んできた。当然、流民は大問題となった。

しかし、魔王出現後、バルディはカルム国民の魔王からの解放を唱えて戦争をしていたため、流民に対して強硬手段を執れなくなつた。結果、流民が多く流れ込んだ王国の北部では治安が悪化し、物価も上昇した。戦争終結後、流民の帰国は少しずつ進んでいたらしい。しかし、そのやり方に不満をもつた流民の一部が暴徒化したのだと記事には書かれていた。

戦争終結、勇者の凱旋、そして訃報と、この二月ほど世間の話題は限られていた。もし仮に魔王が再び現れたのだとしたら、次の勇者はすぐに現れるのだろうか？そして、流民の暴動。北部では戦時中から王への反発の声が増していたという。暴動は最悪内戦のきっかけになりかねない重大事件でもある。

戦争は終わった。しかし、新しい火種が確実に育っていることを感じて、リータは暗澹たる気持ちになった。

……そろそろ部屋に戻って休もう。そう思つてリータは会報を閉じ、暗い感情に蓋をした。シスターソニアが言ったように、シスターが不安に怯えてはいけけない。彼女は笑顔を作つて、それから部屋を出た。

病院は平屋建てで、診療室、処置室、三つほどの病室とリータがいた休憩室があるだけの小さな建物だ。病院の建物は渡り廊下を通じて、すぐ隣に立っている教会に通じている。教会を挟んだ隣にはシスターの宿舎があり、こちらも教会と渡り廊下でつながっている。彼女はそつと教会に向かい、礼拝堂に入った。

礼拝堂の中は暗く、静まりかえっていた。リータは手にしたランタンの明かりだけを頼りに、祭壇の前に歩みを進めた。

祭壇には剣を持った女神の像が置かれている。

それは大陸の守り神である創世の女神の似姿であつた。大陸の民が崇拜してきた、女神教の主神である。女神の持つ剣は全ての悪からこの大陸と人々を守る、女神の祝福の象徴である。神話によれ

ば、女神はこの剣でもって、この大陸に生まれ落ちたばかりの人々を守ったのだという。

勇者の持つ女神の剣は、勇者の剣でもある。かつて、女神は悪しき者によって殺された。しかし、女神から剣を託された一人の戦士により、悪しき者、すなわち魔王は討ち取られた。以降、魔王は現れるたびに、女神の剣を携えた勇者によって撃退されてきた。

本来、『勇者』とは魔王を倒した者に与えられる称号である。そのため、魔王を倒す前の勇者はまだ厳密には『勇者』ではない。しかし、女神の剣の主と認められた瞬間から、勇者たることを運命付けられる。

『勇者』アルフォンソは、期待通り『魔王』ダーヴィドを討ち取った。これによりカルム軍は総崩れになった。一気にカルム王城を占領したバルデイ国軍に、カルム国軍が投降、長きにわたる戦争は終結した。凱旋したアルフォンソは教会により正式に第十四代勇者として認定されたのだった。

リータはランタンを床に置くと、祭壇前にひざまづいた。手を組み、目を閉じて祈りを捧げた。人々を苦難から救ってくれるように、そして、若くして死んでしまった幼なじみに祝福を与えてくれるようにと???

その時だった。突然ガシャンという大きな音がしたと思うと、女の悲鳴が響き渡った。それはフィオナの声だった。リータは礼拝堂を飛び出し、病院へと向かった。

「どうしたの!」

病院にたどり着いたリータが見たのは、割れた廊下の窓とその破片の中に倒れているフィオナだった。

「フィオナ!」

リータは叫びながら駆け寄り、倒れている同僚を抱え起こした。

「しっかりして、フィオナ! フィオナ!」

リータの声に、がうつすらと目を開けた。

「リータ……」

「フィオナ！ 大丈夫？ 立てる？」

フィオナは軽くうなずいて、リータによりかかるとして立ち上がった。彼女はガラスの破片を浴びて怪我をしたのか、体中から血を流していた。リータはフィオナを支えて、幸いにもすぐ側にあつた処置室の中に移動させた。悲鳴を聞きつけ病室から出てきた患者の一人がフィオナを支え、移動を手伝ってくれた。

「一体何があつたの？」

処置室の寝台にフィオナを寝かせる。患者の一人が明かりを付けてくれたので、リータはフィオナの状態を観察した。窓に面していただろう右側の怪我がひどい。顔や頭にもガラスの破片が刺さっていた。しかし、一番大きな傷はガラスによるものには見えなかった。彼女の右肩と腕には、鋭い爪で切り裂かれたような深い傷跡があつた。患者達はそのひどい有様に呆然としていた。

「廊下を歩いていたら突然……あれは多分……」

出血のためだろうか、フィオナの意識は朦朧としているようだった。

「どうしたのですか！」

声がして、処置室にシスターソニアが入ってきた。騒ぎに目が覚めて病院に急いで来たのだろう。ソニアは夜着に上着を着ただけだった。

「シスターソニア！ フィオナが廊下で怪我を！」

ソニアは手早くフィオナの怪我を診察し、顔をしかめた。

「何があつたのです？」

ソニアの質問に、患者達が答えた。

「突然窓が割れる音がして、フィオナさんの悲鳴が聞こえたんです」「その後、何かがぶつかるような音がして、逃げるような音が……」「逃げる？」

ソニアの疑問は、駆け込んできた別の患者によって遮られた。

「庭で火事です！ 早く消さないと！」

処置室のドア越しに、窓の向こうに明るい火が立っているのが見えた。

「リータ、お願い！」

「はい！」

ソニアの声に、リータは廊下に出ようとした。しかし、突然フィオナが叫んだ。

「外に出てはだめ！ 魔獣よ！ 魔獣がいるの！」

？？魔獣。思いがけない言葉に、処置室の空気が凍った。しかし、シスターソニアの反応は早かった。

「リータ！ 教会の鐘を鳴らさない！ リータ！」

呆然としていたリータだったが、自分の名を呼ぶソニアの強い声にハッとなった。

「はい！」

ソニアの意図を察して、リータは教会へと走り出した。

「……何、これ？」

教会の二階にある鐘楼に上がったリータは、村からいくつもの火が上っていることに気づいた。教会は村はずれの丘にあり、鐘楼からは村全体を見晴らすことが出来る。真夜中で本来なら見えるはずのない村が、いくつもの炎によって照らされていた。その恐ろしい光景に、リータはしばし身を凍らせていた。そして、やがて狂ったように鐘を鳴らした。

鐘を打ち終え下を見ると、たいまつを持った数人の人影が見えた。彼らは国軍の鎧を身に付けていた。

助けが来たんだ！ リータは急いで鐘楼を降りた。

4 殺戮と混乱

「リータ！ 一体何があったの？」

礼拝堂の中に戻ると、宿舎からやってきたマリーナと鉢合わせた。彼女も夜着に上着を着ただけで、眠そうな顔をしていた。

「分からない！ 病院に魔獣が出て、フィオナが怪我を！」

「魔獣？ 冗談でしょ！」

マリーナは悲鳴を上げるように叫んだ。

「それだけじゃない、村も燃えてるの！ 病院にも火が！」

リータの言葉にマリーナが信じられないという顔をした。私だつて信じられない、リータは思ったが口には出さなかった。

「兵士さん達が来てくれたみたい。もうすぐここに着くと思う。私は病院に行くわ！ 他の子と兵士さん達にこのことを伝えて！」

「了解！ 私たちも準備してすぐに行くわ」

緊張がみなぎったマリーナの声を背中中で聞きながら、リータは病院への道を走った。

病院に戻ると、そこにはすでに二人ほど兵士の姿があった。リータは彼らに会釈しながら処置室に駆け込んだ。

「シスターソニア！」

ソニアはフィオナに手当をしているところだった。

「大丈夫だった？」

ソニアはリータをちらりと見て、すぐに視線を傷口に戻した。

「はい、村にも火が出ています！ 他の皆も準備が済み次第、こちらに来るはずですよ」

「ええ、軍の方から聞いたわ。村にも魔獣が出たのだとか」

ソニアが魔法をかけたのだろう、フィオナは落ち着いているように見えた。リータは少し安心した。

「軍が早く動いてくれて良かったですね」

「本当ね……今夜は忙しくなるわ。リータ、倉庫からありったけの薬と道具を運んできて！」

「はい！」

リータが部屋を出たところで、一人の兵士と出くわした。
「すみません、どいて下さい」

リータは脇をすり抜けようとしたが、兵士に止められた。

「見習いシスターのリータとは、君か？」

「はい、そうですが……すみません、急いでるんです」

リータは困惑して答えた。どうして今そんなことを聞くのだろう？ 彼女は不思議に思ったが、今は目の前の仕事をこなすことで精一杯だった。

もう一度脇をすり抜けようとしたリータだったが、今度は兵士に腕をつかまれた。何をするのかと彼女が抗議しようとしたら、兵士が言った。

「一緒に来てもらう」

「何を仰っているんですか！ 私には仕事があります。用事なら後でお願いします！」

リータは腕を振り払おうとしたが、男は彼女の手をひねり上げた。リータは悲鳴を上げ、顔は苦痛にゆがんだ。

「あんた、何してるんだ！ リータさんを離せ！」

患者が気づいたのだろう。兵士に向かって叫んだ。彼らの走ってくる足音がリータの耳に届いた。

「何をしたらっしやるんですか！」

騒ぎに気づいたシスターソニアが処置室から出てきた。リータを拘束する兵士に、ソニアは一瞬驚き、険しい表情をした。

「シスターソニア……助けて……」

ギリギリと締め付けられる腕が辛くて、リータは呻くように叫んだ。

「リータを離さない！ この非常事態に何をしたい??うつ」

ソニアの怒気をはらんだ叫びは途切れた。ソニアは後ろから近づいてきた別の兵士に口を塞がれ、喉笛を切り裂かれた。ソニアの首から血が噴き出し、体はビクビクと痙攣していた。やがてその動きが止まると、兵士はソニアの体を押し倒した。

窓の外の火事と、室内のわずかな光が倒れた修道女の体を照らしていた。血が床に広がり、白いはずの服を赤黒く染めていく。

「あ、あ、あ」

リータは目を見開き、その信じがたい光景を見つめていた。ソニアの名を呼びたいのに声が出せず、彼女の喉は痙攣して短い音を発するだけだった。

「お前ら、シスターに何てことしやがる！」

突然後ろから衝撃が起こった。患者の一人がリータを拘束していた兵士にタックルしたのだ。不意打ちをくらい、兵士は体勢を体勢を崩した。リータは兵士を突き飛ばして拘束から逃れた。

「シスターソニア！」

リータは倒れているソニアを抱き起こし、何度も叫んだ。ソニアの顔は驚愕と恐怖で引きつり、目をカッと見開いていた。リータは首の傷を押さえて止血しようとしたが、流れる血は彼女の手と服を汚しただけだった。

「うわあっ」

背後で声がかして、リータは振り向いた。そこには血にまみれた剣を手にした兵士が立っていた。足下には先ほどタックルして来た患者が倒れている。その奥にはもう一人患者がいたが、彼は背中を向けて逃げていくところだった。

リータは何が起こっているのか分からず、ソニアを抱えたまま、ただ呆然として座り込んでいた。庭の火事はますます大きくなっていて、教会や病院に燃え移り始めていた。これは夢なのだろうか？ そうだ、夢に決まっている、こんなの……

「ぎゃあっ」

赤く照らされた闇の奥からまた悲鳴が聞こえた。先ほど逃げている

った患者が殺されたのだろう。リータは非現実的な状況を現実だとは思わずにいた。

「見習いシスターのリータだな。一緒に来てもらう」

座り込んで動けないリータに、後ろから剣が突きつけられた。ハツと顔を後ろに向けると、シスターソニアを殺した兵士が、リータを冷たく見下ろしていた。

剣の切っ先は未だ血を滴らせ、身は炎で照らされて赤く輝いていた。リータは恐怖で身を凍らせ、黙って男を見上げることしかできなかった。

「立て。早くしろ」

リータは血の海の中に座り込んだまま動かない。兵士は動こうとしない彼女に業を煮やし、腕を引つ張って立たせた。

リータの腕からソニアの体がずるりと落ちた。びちゃりという音を立てて、彼女の遺体は再び血まみれの廊下に倒れ込んだ。倒れている恩師の姿に、リータの恐怖は限界に達した。

「いやああああああ！」

リータは立ち上がった、男から逃げようともがいた。しかし、兵士は腕をつかんで放さない。

「大人しくしろ！」

兵士はリータを力任せに押し倒し、それでもなお暴れる彼女の顔に刃を突き付けた。

「生きたまま捕まえるという命令は受けているが、怪我をさせるなとは言われていない。これ以上抵抗するなら……分かるな？」

兵士の恐ろしい形相と突き付けられた刃に、リータは身をすくませた。やがて彼女がうなずくと、男は彼女を再び立たせた。

兵士に追い立てられるように、リータは廊下をのろのろと歩いた。二人の兵士に前後を挟まれてしまい、逃げることはできない。

廊下に患は者達が点々と倒れていた。どうしたら逃げられるだろう？ リータは必死に考えた。しかし、相手は剣を持った兵士で、

彼女に勝てる相手ではなかった。

考えあぐねているうちに、病院の玄関まで来てしまった。突然、先導していた兵士が立ち止まった。リータが前をのぞき込むと、誰かが立っているのが見えた。人影は覆面を覆っていて、顔は見えない。

「何だ、貴様は??ぎゃつ」

兵士が突然後ろに倒れた。リータはとっさに避けようとしたが、倒れる兵士に巻き込まれて一緒に尻餅をついた。衝撃の後、リータが目を開けると、胸の上に目をカツと見開き、胸を切り裂かれて血を流した兵士の姿が映った。

声にならない悲鳴をあげ、リータは反射的に男を振り払い、床に這いずって下がるうとした。

「何をする!」

後ろを歩いていた兵士が怒鳴った声が聞こえ、リータは這いつくばったまま上を見上げた。兵士が剣を構えようとした時、突然ブワッと突風が吹いた。次の瞬間、兵士の首は胴体から離れていた。ドサツと音を立てて、首のない体は仰向けに倒れた。

「ひっ」

あまりに恐ろしい光景を目の当たりにし、リータは思わず顔を背けた。どうして、なぜ! 彼女は一瞬混乱した後、まだ脅威が去っていないことに気づいた。次はきつと自分だ! リータは恐怖に震えながら、背後をそつと振り返った。

玄関口に、覆面の男が立っていた。手には剣を握っていた。その剣は淡い燐光に包まれていて、凄惨な状況とは場違いに美しい。リータは一瞬、剣にみとれた。

やがて男は剣を鞘に収め、呆然としているリータに近づいてきた。リータはハツとして、逃げようとした。しかし、彼女が立ち上がるより早く、男が彼女の腕をつかんで、そのまま彼女を後ろから抱きしめた。

「離して??」

リータは叫ぼうとしたが、彼女の口は男によって塞がれた。男を振り払おうともがいたが、男の腕は力強く、彼女の抵抗にビクともしない。口を塞がれ、身動きも取れずパニックに陥ったリータに、男は耳元で囁いた。

「俺だ。リータ」

リータはハツとして、自分を捕らえている男を見た。覆面を被っていて目元しか見えなかったが、その目の色に覚えがあった。

「遅くなつてすまなかった。??迎えに来た」

口を塞ぐ手が離れ、男は覆面を少しだけ緩めた。そこから覗いた顔は、死んだはずの男のものだった。

「ゆ、うしゃ、さま……?」

男の拘束が解かれた。自由になった彼女は男に向き直った。ふと思い出して彼女は胸を見下ろした。彼女のペンダントが淡く光を放っていた。

あまりのことに言葉が出ない。啞然としている彼女に、男は優しく微笑みかけた。

「もう大丈夫です。あなたが無事で良かった……」

勇者はそのままリータを抱きしめた。逞しい胸に抱きすくめられ、彼女は一瞬困惑したが、人の暖かさを感じて、リータの緊張の糸が切れた。彼女の瞳から次々と涙が零れてきた。

「シスターが、シスターソニアがあ……患者さん達もみんな……どうして、どうして」

泣きじゃくるリータの頭を、男がそつとなでた。

「ひどい目に遭いましたね。もう大丈夫ですよ」

耳元で囁かれた低い声は、彼女の心に優しく響いた。男はしばしの間、リータを抱きしめていた。

「申し訳ないが、まだ危険は去っていません……立てますか？」
男の言葉に、リータは状況を思い出した。顔を上げて、こくり

と頷くと、男から離れた。

「ありがとう……アル」

リータは涙を袖でぬぐって、立ち上がった。

その時、背後からキヤー！ という女達の声が聞こえた。振り返ると、マリーナ達の姿がうつすらと見えた。

「マリーナ！」

リータは友人達に叫んだ。しかし、男にまた口を塞がれた。ふがふがと抗議の声を立てるリータに、男が囁いた。

「彼女たちに私のことを知られるのはマズいのです。彼女たちには悪いが、行きましよう」

アルは彼女をひょいと肩に担ぐと、そのまま走り出した。

「リータ!？」

マリーナの声が一瞬間こえたような気がしたが、リータが返事をすることはかなわなかった。

5 勇者様と人攫い

「ねえ、下ろして！」

「喋ると舌を噛むよ」

リータを肩に担いだまま、アルは走り続ける。背中を叩いたり、手足をばたつかせて抗議したリータであったが、アルは意に介する様子もなかった。やがて暴れる方が危険だと諦め、リータは運ばれるに任せた。

アルは教会の裏手に回り、そのまま森へと向かった。

「ちよつと！ どこへ行く気ですか？ そっちは黒い森で、村は反対方向……」

真つ黒な森を、薄い月明かりが照らしていた。担がれたまま身動きの取れないリータは、頭巾を押さえ、軽く頭を上げた。村のあるはずの方向には赤い空と、煙が上がっているのが見えた。

「とりあえずあの遺跡へ。仲間が待ってる」

一度合流して体勢を立て直すということだろうか。リータは納得しかけたものの、マリーナ達が心配で仕方なかった。教会の鐘楼からは、教会へ登る道を歩いている兵士達が見えた。彼らも敵なのだろうか？ もしそうならマリーナ達も危ないということになる。リータは疲労した頭を必死で動かし、自分を、村を襲っている状況を考えていた。

病院を襲った連中は確かに国軍の軍装だった。正規軍があのような教会施設で暴挙を行うはずはない。もしかしたら、軍の格好をした夜盗かもしれない。彼女はぼんやりと考えた。フィオナが襲われ、シスター達が死に、連れ去られそうになったところで死んだ男に助けられた。あまりに多くのことが一度に起きて、リータの思考は混乱し、感覚は鈍磨していた。通常の状態ならまず考えるはずの疑問すら浮かばない程に。

アルは森をひた走っている。月明かりと男の腰から下げられたほ

のかに光る剣だけが、彼らの道行きを照らしていた。男が足を踏み出すたびに与えられる振動が、リータにはいつの間にか心地よくなっていた。現実じゃないみたいだ。本当に、夢なら良いな。疲労困憊した彼女の意識は少しずつ薄れていった。

「着きましたよ」

男の声に、リータはハッと意識を取り戻した。遺跡のある草地に下ろされ、彼女はゆっくりと立ち上がった。不自然な格好で頭に血が上ったのだろうか、リータは眩暈と立ちくらみを感じた。ふらついていた彼女の肩をアルがそつと支えた。

「大丈夫ですか？」

アルはリータの顔をのぞき込んで優しく語りかけた。目を合わされて、リータは思わず頬を染めた。

「だ、大丈夫です」

リータは一步下がって、顔を伏せた。一瞬感じた気恥ずかしさを目の前の男に気づかれなくなかった。今はもつと重大な問題があるのに！ 彼女は自分を恥じた。リータは表情を整えて顔を上げると、ごまかすように周囲を見回した。辺りには彼ら以外に人の気配はなかった。まだアルの仲間が来ていないのだろう。

「仲間の方とはここで？」

リータの質問に、アルは頷いた。彼によれば、仲間は村の方を偵察しに行ったという。

「あの、村は大丈夫なんでしょうか？ お願いです。村を助けて下さい」

彼女は顔を上げて、男に向き直った。勇者とその仲間がいるのなら、魔獣も夜盗もどうにでもなるだろう。リータはさすがの思いだった。しかし、アルは彼女の顔を見つめたまま、動こうとはしない。

「……勇者様？」

勇者という言葉に、男は一瞬表情をなくした。リータは自分を見下ろす男の目に困惑した。

「アル、と呼んで下さい。勇者様、ではなく」

アルの表情は優しいものに戻っていた。しかし、それが無理矢理作っているもののように見えて、リータは言いようのない不安に襲われた。

「分かりました、アル。それよりも、あの、仲間の方と合流したら一度教会に戻って頂けますか？ 村から兵士達が来るのが見えませんでした。もし彼らが病院を襲った夜盗の仲間なら、みんなも……！」

「悪いが、それはできません」

アルの言葉にリータは愕然とした。勇者様は私達を救ってくれる存在のはずだ。なのにどうして彼は動いてくれないのだろう。彼女は必死に訴えた。

「村も燃えていました。あなたも煙くらい見たでしょう？ テレーザの家だって……」

テレーザの名に、男が一瞬反応したのをリータは見逃さなかった。「お願いです！ みんなを助けて下さい！ このままじゃテレーザだって……」

その時、二人の背後でガサリと小さな音がした。リータはハツとして息を飲んだ。アルも緊張しているのか、一転して険しい表情をしていた。二人は遺跡の影にしゃがみ、姿を隠した。アルは剣の柄を握ったまま、音の主に注意を向けていた。

ガサガサと音を立てて何者かは二人の方に近づいてきた。やがて木の陰から黒い男のシルエツトが現れた。男は手に小さなランタンを持っており、それを二度左右に振った。

「……クロードか？」

アルは姿を隠したまま人影に呼びかけた。

「アル？」

人影も声を発した。その声を聞くと、アルはホツとしたようにリータに仲間が来たのだと言った。彼はゆっくりと立ち上がって、クロードと呼んだ男にもう一度呼びかけた。

呼びかけを受けた男は静かに二人の方へと近づいてきた。男は覆面で頭部を完全に覆っており、目がわずかに見えるだけだった。体格はアルよりも大きくしっかりしており、背中には槍を背負っていた。

男はアルと視線を交わした後、彼の側に立ち尽くしているリータを見つめた。その目はどうしてか厳しく、冷たいものに感じられた。リータはその視線に萎縮し、目を反らした。

「クロード、村はどうだった？」

アルが男に話しかけた。

「魔獣が出たようだが、そっちはすぐに片が付きそうだ。カナレス家と村の狩人がうまくやってる。火事の方もそれほどひどくない。隣村からの救援もまもなく着くだろう」

「本当ですか！ 良かった……」

リータは思わず声を出した。村は大丈夫だと聞き、彼女はホッとした。しかし、現状の懸念はそれだけではない。

「でも、まだ教会の方が……お願いです。すぐに戻って、教会を助けて下さい。まだ私の同僚が残っているんです！」

リータは目の前の二人の男にすがった。しかし、アルは困ったような顔を浮かべるだけだった。クロードの方も冷ややかに彼女を一瞥すると、アルの方に意味ありげな視線を向けた。

「どうして私たちを救って下さらないのですか？ アル、あなたは女神様の代行者でしょう！ このままじゃみんな……」

「何で俺らが助けないといけないんだ。状況も分からないのか？」

「これだから女は……」

アルの胸ぐらを掴んで詰め寄るリータの叫びを遮って、クロードが言い放った。突然の言葉に、彼女は怒るより呆然とした。アルはたしなめるような視線をクロードに送った。しかし、クロードはアルの方を向いて言葉を続けた。

「だってそうだろ？ 何で自分らを探してる人間の前にノコノコと現れないといけないんだ？ 大体、あいつらはこの女捕まえに来た

んだろ」

「え、どういうこと？」

自分を捕まえに来た？ どうして？ 混乱するリータに、クロードがあざ笑うように答えた。

「だから、勇者を釣るための餌だよ。逃げ出した勇者様を捕らえるために『秘密の恋人』を使おうと思ったんだろ。村が襲われたのもそのためさ」

「なっ！」

村や教会が襲われたのは私のせい？ 何で、どうして？ リータの頭は激しく混乱した。

「どうして勇者様が追われるのよ！ 大体『秘密の恋人』って何よ！ 私はそんなのじゃないわ！ それに、大体勇者様は死んだんじや……ん、あれ？」

リータは困惑した。色々なことが一度に起こりすぎて、何が起きているのか分からない。そうだ、勇者様？ アルは死んだんだ。それなのにここにいて、私を助けてくれた。でも、追われてる？ 誰に？

「……もしかして、お前、何も知らないのか？」

表情を殺して硬直しているリータを見て、クロードは呆れたように言った。そして、頭をポリポリと掻くと、アルの方を見た。

「恋人じゃないとも言ってるぞ。どういうことだ、おい」

「確かに恋人じゃない。いずれ妻にする人だ」

アルはしれつと言った。その様子を見て、クロードはハアとため息をついた。

「……まあいいや。アル、とにかく行くぞ。見つかったら面倒だ」

「そうだな……リータ、大丈夫か？ 行くぞ」

アルに話しかけられ、リータは肩を震わせた。この人たちは何を言っているの？

「……一体何なの？ 何が起こっているの？」

そう呟いて動けないでいるリータに、アルが話しかけた。

「リータ、巻き込んで済まない。こんなつもりではなかったんだ……」

落ち込んだ様子のアルの言葉を引き継ぐように、クロードが口を開いた。

「ねーちゃん、俺たちは追われている。捕まったら俺たちは間違いなく殺される。だから早く逃げないと」

「……何で逃げるんですか？ 勇者様が生きてるのは良いことじゃないですか」

「事情は後で必ず説明する。だから、今は……」

「リータ！」

アルの言葉は突然森に響いた女の声にかき消された。

振り返ると、教会からの道にたいまつの灯りが見えた。複数の人の気配が近づいてくる。男たちが緊張した。

「リータ！」

再度女の声が響いた。マリーナの声だ！ リータは反射的に叫んだ。

「マリーナ！ 私はここよ！ 助け……」

「やめろ！」

リータの思いがけない行動に、アルは慌ててリータを取り押さえ、口を押さえた。何やってんだ！ とクロードが怒気をはらんだ声で言う。

「痛！」

リータはアルの手を噛み、彼の拘束から逃げようとした。

「マリーナ！ 助けて！」

リータはもう一度叫んだ。しかし、アルはリータを離さない。彼女は何とか逃げようと力の限り暴れていた。見かねたクロードが彼女の口に布を押し込んだ。リータは突然の息苦しさに、フガフガと口の異物を吐き出そうと喘いだ。

「クロード……」

アルは仲間を咎めるように言った。

「逃げるためだ、仕方ないだろ！　それがダメならその女は置いていけ！」

「……」

「連れてくなら早く何とかしろ。時間がない！」

黙り込んだアルは腕の中で興奮状態になっているリータを見つめた。

「o p n A L P H S」

自分を押さえ込んでいる男の呟きに、リータはおののいた。魔法を使う気だと気づき、彼女は逃げだそうともがいた。しかし、アルの詠唱は素早い。

「m g c S L P o m d s」

さすがに勇者なだけあるのか。魔法の効果は素早く現れ、リータの意識はぼやけ始めた。彼女の体から力が抜け、自分の意志で手足を動かすこともできなくなった。

「これじゃ人攫いよ……」

リータはぼそりと呟いた。

「ごめん」

耳元で囁かれた小さな声を最後に、彼女は深い眠りに落ちた。

「e x t」

アルはリータが動かなくなったのを確認し、そのままもう一度肩に担いだ。アルとクロードはそのまま黒い森へと踏み込んだ。

三人の姿が消えた直後、遺跡にマリーナと数人の兵士がやって来た。しかし、そこにはもう彼らの痕跡は残っていなかった。

「リータ……」

友人を案じる女の声は、闇に消えた。

6 駆け落ちと誘拐

真夜中の森を、二つの影が静かに駆け抜けていく。森の中の獣道、近隣住民しか知らないような小道に分け入り、彼らはどんどん森の奥へと進んでいった。

しばらくすると、彼らの視界が少しだけ開けた。その先には小さな小屋が建っており、その横には馬が二頭つながれていた。馬は眠っていたが、彼らの接近に気づいて少しだけ頭を上げた。槍を背負った男が馬に近づいて、その頭をそつとなでた。

もう一人の男は肩に女を担いでいた。軍人として鍛えられた体にも、人を一人担いで走るのは大変だったのだらう。彼は小屋の中にそつと女を寝かせると、その横に座り込んでしまった。

「アル、大丈夫か？」

外で馬を見ていたクロードだったが、小屋の中に小さく声をかけた。

「問題ない。ちよつと疲れただけだ」

ふうと、大きなため息の音が外にいるクロードにも聞こえた。あのひよろつとした子がよくここまで立派になったな、とクロードは場違いな感慨にふけた。

クロードが小屋に入ると、アルは眠っている女？？リータの隣に横たわっていた。リータには毛布がかけられ、その顔は薄暗くてよく見えない。部屋の中には小さなランタンが一つあるだけだった。

「おい、今から手を出すなよ。夜明け前には出るからな」

クロードはニヤリと笑った。アルはからかわれたのせいか少しだけ赤くなって、分かっている、とすねたような口調で答えた。

「なあ、その子、リータだっけ？ 彼女は今回の件、どこまで知ってるんだ？ 何だか混乱してたみたいだけだ」

問いかげに、アルは起き上がった。

「何も知らない」

「何も？」

呆れたようなクロードの言葉に、アルはもう一度答えた。

「何も知らない。この間会った時に、今度迎えに来るって言っただけだ」

「はあ？ まさかと思うが……もしかして、駆け落ちのことも？」

「知らない」

あっけなく答えたアルに、さすがのクロードもめまいを感じた。

「知らないって、お前……」

「仕方ないだろ、非常事態だったんだから」

確かに、村への襲撃は彼らの予想外だった。リータの存在を知っていたのはクロード他数人の協力者などごく限られている。

「誰が彼女のことを漏らしたんだろうな？」

「……恐らくシスターアリシアだ」

クロードの呟きに、アルが憎々しげに吐き捨てる。シスターアリシアは王都にある女神教会の大司教であり、バルディ王国全土にある教会のトップでもあった。

見習いシスターであるリータをもらい受けるため、アルは事前にシスターアリシアと面会していた。彼女は勇者の申し出に驚いていたが、快く協力を引き受けてくれた。そして、女神に誓ってこのことは内密にする、とも。

「女神教会のシスターが『勇者様』の命令に背くのか？」

「さあな」

ぶっきらぼうに答えるアルに、クロードは苦笑した。

「勇者といえど、国家の敵となればそんなものか……」

クロードの言葉に、アルはちらりと視線を送っただけで何も言わなかった。その代わりなのか、アルは大きなあくびをした。目をこすっている友人に、クロードはそっと声をかけた。

「先に休めよ。人を担いで走ってきたんだ。疲れただろ？」

「あ……ごめん、クロードも疲れてるのに。しばらく経ったら交代するよ。起こしてくれ」

「了解」

クロードの返事に手を振って、アルはそのまま横たわった。

小屋の中には二人の寝息が響いていた。アルは気持ちよさそうに眠っている。その様子を確かめてから、クロードはそっと小屋の外に出た。

空には月が浮かんでいる。濃い闇を照らす白銀の光に、クロードはふと一月前のことを思い出した。

ある夜のことだった。クロードは寝ようと思ったその直後、今は主でもある三つ年下の幼友達に呼び出された。主の部屋へと向かう道を、闇夜にぽっかりと浮かぶ月が照らしていた。

部屋に入った途端、彼の主はとんでもないことを言い出した。

「駆け落ちする。手伝ってくれ」

「は？」

唐突な言葉に、クロードは思わず聞き返した。

「だから、駆け落ちだ。『勇者様』はもう辞める」

「アル、お前何を言ってる……」

幼少時からの長い付き合いであるクロードは、アルの突拍子のない発言に慣れている。しかし、今回はさすがのクロードも絶句した。「魔王は倒した。勇者としてのの宿命は果たしたんだ。だから、俺はもうただのアルに戻りたい」

「勇者を辞めたい、はまだ分かるが……何で駆け落ちなんだ？ それに相手は？」

「……幼なじみだ」

「それって、例のセラ村の？」

アルは頷いて、少し照れたように視線を落とした。彼はこれまでどんな美女にも見向きもせず、一部では女に興味がないという疑惑

すら持たれていた。勇者になって以来、ふさがちだったアルをずっとそばで見してきた。弟のように思っている彼が、年相応な面を維持していることにクロードは少しだけ安堵した。

「別に駆け落ちしなくてもいいだろ？」

「父上は彼女との結婚を絶対に許さない」

「そんなの言ってみないと分からないだろ？」

クロードの言葉をアルは鼻で笑う。その顔には皮肉そうな笑みが浮かんでいた。

「父上は彼女を受け入れない。それだけは確実だ。彼女と一緒にいるには、駆け落ちしかない」

「しかしなあ……大体お前、次期当主だろ。勇者辞めるのはともかく、逃げるのはまずいだろ」

「跡ならニコーラが継ぐよ。父上もまだ若いし、俺がいなくなってもさして問題はない」

「……家が嫌なのか？ なら、大人しく王女と結婚すりゃいいだろ」
「王家なんて冗談じゃない」

アルは吐き捨てるように言った。その顔には嫌悪感が満ちている。ごく親しい間柄のわずかな人間しか知らないが、アルは王家を嫌っていた。彼が『勇者』になって以降、その傾向は悪化する一方だった。当然アルは巧妙にその感情を隠していたが、クロードのような遠慮のいない相手にはその思いを時折吐露していた。

クロードはある程度の事情は知っている。彼らの勇者に対する態度を考えれば、王家を忌み嫌うアルの気持ちは分からなくもない。しかし、クロードはあえて軽く言い放った。

「何でだよ。うまくいけば次の国王陛下だぜ。そうすれば女なんていくらでも困えるだろ。前国王のフェルナンド様みたいに」

国王の一人娘である王女が勇者に夢中なのは、王宮では有名な話だった。実際、二人を結婚させようという話が持ち上がった。しかし、クロードの言葉にアルは激怒した。

「ふざけるな！ 俺は愛人なんて作らない！ 妻一人で十分だ」

怒りを爆発させて叫ぶアルに、クロードはひるんだ。ここまで感情を露わにした彼を、クロードは見たことがなかった。

「あー……すまん」

アルのあまりの剣幕に、クロードは平謝りすることしか出来なかった。アルは不機嫌そうな表情のまま、話を続けた。

「知つての通り、父上は俺を王女と結婚させる気だ。でも俺はこんな話に乗る気はない」

アルはふつと表情を消し、足下を見つめた。

「……このままここにいたら、ずっと『勇者』として利用されるだけだ」

「だから、『歴史から消える』ことを選ぶのか？」

クロードの問いかけに、アルは静かに頷いた。その目には暗いものが渦巻いていた。

「？？勇者は王になるか消えるかどちらかしかない。おれはどちらになるんだらう？」

女神の剣を初めて手にしたアルが自嘲気味に呟いた言葉を、クロードは今も忘れられない。

弟のように思っている男の苦悩を目の当たりにして、クロードはため息をついた。アルはここでは幸せにはなれない。それはクロードにも薄々分かっていったことだった。

アルの父親には、どういう訳か息子を政治の道具としか考えていない節がある。『勇者』という最高のカードをどう使うか、つまりアルの生殺与奪の権利一切は彼の父親に握られていた。しかし、それではアルの払った犠牲や労苦は何だったのだろうか？ とクロードは思う。生死を共にしてきた友人の願いに、彼は覚悟を決めた。

「分かった、手伝うよ」

その日以来、クロードはセラ村の周辺の状況や、逃亡ルートの手始めを始めた。

実行は、本当ならもっと後になるはずだった。しかし、アルの身

に降りかかった抜き差しならない事態により、準備不足のまま作戦を遂行する羽目になった。

それでも計画があつて良かったのかな、とクロードは思う。おかげでリータをすんでの所で助けられた。捕らえられた彼女がどのような目に遭うかを考えたら、それは僥倖に思えた。

そんなことを考えながら、クロードは馬の側に座ってぼんやりと空を眺めていた。たてがみをなでると、馬が少しだけ目を開いた。

しばらくして、小屋の中からアルが出てきた。

「まだ寝ててもいいぞ」

「もう大丈夫だ。クロードも休んでくれ」

「悪いな。そうさせてもらうよ」

クロードの言葉に、アルが目をふせた。

「こんなことに付き合わせてしまつて、すまん」

「そんなこと言ってくれるな。俺とお前の付き合いだろ」

苦笑するクロードに、アルは困つたように笑つた。

小屋に入ろうとしたクロードは、ふと思い出したことがあつて足を止めた。

「……そういえば、一つ確認したいんだが」

「何だよ？」

奥で眠っているリータを横目で見て、クロードは意を決して口を開いた。

「彼女、自分は恋人じゃないと言つてたな？ どういうことだ」

「プロポーズはした」

「これまでも密かに付き合つてたんじゃないのか？」

「……最後に会つたのは八年前、士官学校に入る前だ」

「八年！？」

アルはクロードの驚きを全く意に介さない様子で頷いた。

「あ、そうか、手紙のやり取りとかしてたんだな？」

「してない。彼女の幼なじみやその親と、ちょっと手紙のやり取りをしてただけだ」

「……ちなみに、プロポーズの返事は？」

「聞いてない」

クロードは頭を抱えた。遺跡で彼女が村に戻りたいと言ったのも当然だ。これじゃ誘拐の片棒担ぎじゃないか、どうしよう、と今更ながら自分のやったことを後悔した。

「お前、彼女に嫌われてたらどうすんだよ！」

クロードの言葉に、アルはきよとんとした。

「構わない。これから好きになつてもらえば良いんだから」

前向きすぎる言葉に、クロードはどつと疲れを感じた。

ふらふらと小屋に入ったクロードの目に、静かに眠るリータの姿が映った。

昨夜の彼女の混乱ぶりとは非協力的な態度の理由が分かり、クロードは目の前の女に少しだけ同情した。前途多難だ。彼は心の中で咳いた。

そうして彼は、押し寄せてくる疲労感に身を任せた。

7 ことの始まりと狂った運命

リータが目を開けると、そこは知らない部屋だった。粗末な木造の小屋で、壁には狩猟に使う道具などがわずかに立てかけられていた。小さな窓からはうつすらとした光がわずかに差し込んでいたが、一番の光源は側に置かれていた小さなランタンだった。

なぜ自分はこのなところにいるのだろうか、彼女は寝ぼけ眼のまま、ぼんやりと座っていた。

ガチャツと扉を開く音がして、リータは反射的に身をこわばらせた。開いた扉から入り込んできた男の顔を見て、彼女は唐突に全てを思い出した。

「おはよう。気分はどう？」

爽やかに笑いかける美しい青年の顔に、彼女は強い怒りを感じた。

リータはアルにつかみかかると、きつくにらみ付けて怒鳴った。

「これは一体どういうこと？ 私を村に帰して！」

喚く彼女を宥めるように、アルは優しい声で言う。

「危険な目に遭わせてしまってすみません。ですが、もうあなたを村に返す訳にはいかないのです」

「どうして！」

「あなたは狙われています。私を追っている人たちに、私の恋人だと知られてしまったから」

アルはリータの頭をなでようと手を伸ばした。しかし、リータはその手を打ち払い、キツと彼を見据えた。

「私はあなたの恋人じゃありません。大体何で勇者様が追われているんですか？ どういうことなのか、ちゃんと説明して下さい！」

リータの剣幕に押されたのか、アルはふっと小さく息をついた。

そして、真面目な顔で彼女に向き直った。

「……時間がないので手短かに話します。今、私は国家反逆罪で追われています」

思いがけない単語に、リータは言葉を失った。国家反逆という言葉の重さに、彼女の顔から血の気が引く。その様子を見て、アルはあわてて付け足す。

「もちろん、私は関わっていません……父が、関わっていたのです」

「お父様？ 将軍が？」

「私と一緒に死んだことになっている父とガンディー二公……二人が中心となって国王陛下へのクーデターが企てられていました」

「クーデター？」

「そうです。国王陛下に不満のある貴族や軍人を集め、陛下を暗殺する気だったんです」

「どうしてそんなことを！」

リータは青ざめた顔で叫んだ。国王を暗殺するなど、彼女にはとても考えられないことだった。アルは神妙な顔つきで話を続けた。

「南にいると実感が無いと思いますが……北の方では国王陛下への不満がかなり高まっています。戦場になった挙げ句、魔王による悪影響をもろに受け、しかも難民まで受け入れる羽目になった？？北の疲弊はもう限界なんです」

「ですが、国王陛下を暗殺したとして、問題は解決しないでしょう？」

「彼らはエドアルド様を担ぎ上げるつもりでした」

王の腹違いの弟であるエドアルドは軍人として名高く、今回の戦役でも司令官として多くの功績を挙げた人物だ。当然国民の人気は高く、特に軍内での支持は国王を圧倒している。そして、難民の処遇に対しては強行的な意見を持っていた。クーデター派の御輿には格好の人物だろう。

「エドアルド様は大変敬虔で、高潔な人物とお聞きしています。本当にそのような計画に荷担なさったのですか？」

エドアルドは敬虔な女神教の信者としても知られていた。教会への多額の寄付や奉仕活動を支援によって、教会内でも彼の評判は良かった。リータの疑問も当然だった。

「あの方はとりあえず無関係です。ですから、まだ生きておられます。ただ、療養を理由に、王城に幽閉されているようですが」

「幽閉……」

次々と聞かされる重大事項に、リータは呆然とした。ただ、まだ肝心な点が分からない。彼女は恐る恐る聞いた。

「どうしてあなたが追われているのですか？ 死んだことにされたのはなぜ？」

「私も関与を疑われ、襲われた。でも、自分の身だけは守ることができた。……これのおかげで」

アルは腰に帯びた剣をちらりと見た。それは美しく輝く女神の剣だった。

「本来なら王城で武器を帯びることは許されません。しかし、『勇者』は別です。だから突然の攻撃を防げたんです。身を守る手段のなかった父たちは……」

アルの顔に影がよぎった。彼は自分を見つめる女の目から目を反らし、続けた。

「陛下はクーデター計画をご存じだったのでしょう。だから、あんな形で……」

「ちよ、ちよっと待って下さい。確か魔物に襲われたと聞いているのですが」

「そうです。陛下はわざわざ生け捕りにした魔物を王城に放ち、我々を襲わせました」

「どうやって魔物に特定の人物を襲わせるんですか。彼らは女神の理から外れた存在です。操る術はないはずですよ」

リータの言葉に、アルは皮肉めいた笑みを浮かべた。

「その通りです。だから、陛下は魔物の習性を利用しました。彼らには、『勇者』を感知して優先的に襲う性質があるんです」

リータは絶句した。魔物をそのように利用するなんて。聖典によれば、魔物や魔獣はこの世界の？女神の理に外れた存在であり、哀れみを持って排除すべき存在である。それを国王自ら肅正に使うなど！シスターとしての教育を受けているリータには、それは背筋が凍るほど恐ろしいことだった。

「……私は陛下を守って戦いました。あの時は気づきませんでした。……私に、どういふ訳か私を援護してくれる人はいませんでした。近くには近衛兵が大勢いたはずなんですが」

「それがどうして反逆罪に？陛下を助けたのはあなたなんですよ？？」

リータの質問に、アルは目を伏せた。

「魔物を何とか撃退し、父達を助けようとした私に、陛下が仰いました……私にも反逆の意志があるのかと。もちろん否定しましたが、陛下は信じては下さいませんでした。捕らえられそうになった私は何とか逃げました」

「それで、亡くなったことにされた、と……」

アルは憂い顔のまま頷いた。

「さすがに『勇者』を表立って犯罪者扱いはできません。だから死んだことにして、密かに捕らえようと考えているのでしょうか」

考えるだに恐ろしいことを立て続けに聞かされ、リータはめまいを感じた。彼女はアルから離れると、崩れるように座り込んだ。

「どうしてこんな恐ろしいことが起こっているのだろうか？リータは思う。戦争は終わり、魔王は倒されたはずなのに、どうして国王陛下自らがこのような恐ろしいことをなさるのだろうか？」

リータは青ざめた顔で床を見つめていた。アルはしゃがんで、彼女の顔をのぞき込んだ。彼が大丈夫？と声をかけると、リータは呆然と顔を上げて、小さな声で恐る恐る尋ねた。

「じゃあ、あの人たち……教会を襲ったのも国王陛下の？」

「国王直属の秘密部隊でしょう。私を追っているのも彼らです」

「村を襲ったのも？ 魔獣も？」

アルは小さく頷き、答えた。

「生け捕りにしておいたのを放したのでしょうかね」

「何でシスターソニアを……みんなを殺したの？」

「夜盗のしたことに見せかけるため、でしょう。君を名指しで連れ去ろうとしたことをカモフラージュする理由もあるかもしれない。

……それに」

アルは少しだけ言葉を切った。

「私に見せつきたいんだと思います。早く出てこないと、私の大事な場所や人が傷つくことになるぞ、と」

小屋の中は静寂に包まれた。座り込んでうつむいているリータを、アルは静かに見下ろしていた。どうしようか逡巡している内に、彼は小屋に近づいてくる足音を聞いた。そつと外をうかがうと、足音の主は偵察から帰ったクロードだった。

空は白みかけており、もうじき朝が訪れることを告げていた。もう行かなければならない。アルは小屋の隅に置いてあった袋を手にし、傍らのリータに声をかけた。

「悪いけど、もう出発しないといけない。そろそろ追っ手がかかる頃です。……これに着替えて下さい。その服装は目立つから」

顔を上げた彼女にそつと着替えの入った袋を差し出し、彼は小屋から出ようとした。

その背中に、突然声が投げつけられた。

「あなたの、せいじゃないの？」

アルが振り返ると、感情のない顔で自分を見つめているリータと目があつた。

「あなたが私にあんなこと言わなければ、あんなひどいことは起こらなかったんじゃないの？」

虚を突かれ、何を言っているかわからないアルに、リータは更に

言葉を投げつける。

「あなたのせいで村が襲われて、みんな殺されたんじゃないの？」

「そんなつもりは」

「……ひどすぎる……許せない」

リータの言葉に、アルは唇を噛みしめた。

「私は、村に帰る」

リータはゆっくりと立ち上がると、目の前の男を見据えて言った。

「あなたがここにいることを軍に言うわ」

「そんなこと……」

アルは苛立たしげにリータを見つめた。二人の間に冷たい空気が流れた。

「そんなことしたって、君が捕まってひどい目に遭うだけだよ」

沈黙を断ち切ったのはクロードだった。リータは見知らぬ男の登場に身を固くした。

「クロード」

アルも振り向いて男の名を呟いた。

「アル、もう街道には手配書が回ってる。こついう時だけは行動が早いよな。あいつら」

クロードはリータの方を向いて、人の良さそうな笑みを浮かべた。眉をひそめたリータに、クロードは語りかけた。

「俺はクロード。アルの幼なじみでちょっと前までは部下だった。

よろしくね、リータちゃん」

なれなれしい口調に、リータの顔が更に渋くなり、その目には疑いの色が浮かんだ。

「冷たいねえ。まあ仕方ないかもしれないけど。……とにかく、村には帰らない方が良いよ」

「どうしてですか？」

リータは強い調子で聞き返した。クロードは肩をすくめて答えた。「君も手配されてる。教会に夜盗が入るのを手引きした信仰の裏切

り者としてね。ほら、この通り」

クロードは手にしたチラシを見せつけた。そこにはリータの名前と身体的な特徴、そして、お金のために恩人と仲間と信仰を裏切ったと書かれていた。

「冗談でしょ！」

そのあまりの内容に、リータは驚愕して顔色を失った。彼女はクロードからチラシを奪い取って、内容を確かめた。

そこには、セラ村と教会、および付属病院が夜盗に襲われ、シスターソニアと二人の見習いシスター、そして多数の患者が殺されたことが書かれていた。震える手でさらに読み進めると、夜盗はリータの手引きにより村内に侵入、彼女は彼らと共に逃走した、とあった。

しかし、何よりも彼女の目を引いたのは犠牲者の名前だった。そこにはマリーナの名が記されていた。リータは森の中で、確かに彼女の声を聞いた。それなのにどうして。リータの頭は更に混乱した。「どうしてこんなことに」

文章を目で追いつつ、震える声でリータが呟いた。

「そういう訳だから、一緒に来ないと君も捕まって死罪だよ」

そんな……と呟いたきり、リータは茫然自失の状態に陥った。手にした紙片を握りしめ、どうしてこんなことになってしまったのか、私はこんなことはしていないと考える。様々なことがグルグルと頭の中を駆け巡り、彼女の思考を乱していた。

「ちなみアルが夜盗な」

そんな彼女を横目に、クロードはアルに別のチラシを渡した。

「これで罪名も付いたし、正式な逃亡者になったな」

クロードがアルの肩をポンと叩いた。アルは苦笑いを浮かべてクロードを見た後、リータに歩み寄った。

「申し訳ない」

アルはそう一言だけ言って、頭を下げた。リータはこみ上げてく

る怒りをどうしていいか分からず、ただ目の前の男をにらみ付ける
しかなかった。

8 理不尽と不安

鬱蒼とした森の中を二頭の馬が進んでゆく。先導する馬に乗るのはクロード、後ろに続く馬にはアルとリータが乗っていた。

彼らが進むのは、黒い森を抜けるのに使われていた古い街道だ。この街道は、かつては大陸を南北に横断する主要なルートの一つだった。しかし、前国王の時代に宿場町まで整備された新しい街道が作られて以降、この道はあまり使われなくなっていた。

他に道があるのに、わざわざ呪われた森を通ろうとする物好きなのはそうそういない。使うのは黒い森に慣れた人々がほとんどだった。

彼ら以外ほとんど人気のない道を、馬たちは一路走り続ける。

リータはアルに抱えられるような格好で馬に乗っていた。彼女は手綱をきつく握り、体を硬くしてできるだけ男に触れないように縮こまっていた。声をかけられても、事務的に言葉を返すだけだった。そのうちに、アルも話そうとするのを止めた。

リータは昨夜の惨劇が思い出していた。血まみれのフィオナ、廊下に倒れる患者さん達、目の前で息絶えたシスターソニア。昨日だけで、あの狭い村で一体何人死んだのだろうか？ 怪我人だって、一人や二人ではすまないはずだ。リータの目頭が自然と熱くなる。

「どうかした？」

真後ろから声がかかる。リータの様子がおかしいことにアルも気がついたのだろう。

リータはとっさに眉間を押さえて涙をこらえた。泣いている場合じゃない。彼女は冷静になれと自分の心に言い聞かせた。

「……大丈夫です」

「そうですか？ ……疲れたなら言ってお下さいね」

彼女の返事に、男は怪訝そうな声を返した。

前を向いて、流れていく景色を眺めながら、リータは自分の置かれた状況を客観的に捉えるよう努めた。そして、これから自分がどうしたいかを考えた。

やがて、彼女が定めた目標は二つ。何とかして自分にかけられた容疑を晴らし、村へ帰ること。そして、教会の許しを得て、シスターとしての生活に戻ることに。

そのためにはどうしたら良いのか、この部分で彼女の思考は堂々巡りを始める。良い方法はそうそう浮かばない。このような途方もない事態はそもそも彼女の想像の範疇ではなかった。

また、『勇者の求婚』という頭の痛い問題も残っていた。シスターでいれば、彼女は勇者リアルに従わない訳にはいかない。

そもそも、本当にこの人は勇者なのだろうか？ リータはぼんやりと思う。勇者様がこんなことをするなんて前代未聞だ。国家反対の汚名を着せられ、死んだことにされた挙げ句、シスターをさらって逃亡する……とても正気の沙汰とは思えない。

勇者は女神の代行者だ。だから、勇者は誰よりも清廉潔白で公平な人物であるはずなのだ。リータがかつて読んだ勇者列伝に出てきたのは、皆そのような人物ばかりだった。

あれこれと思考を巡らせていたリータだったが、頭に巻いたスカーフの隙間からこぼれ出た髪が目に入った瞬間、現実を引き戻された。

茶色い髪を眺め、リータはその奇跡の力について思う。外見を一瞬で変えてしまうとは、まさしく奇跡だ。あんな魔法を実現させるのは、彼の持つ女神の剣の力が本物だからだ。それは彼が真に勇者である証だった。

リータはぼんやりと、朝方のことを思い返していた。

口論を切り上げ、服を着替えて小屋から出たリータは、外で待っていた男を見て驚いた。アルの髪の毛と、瞳の色が変わっていた。さらさらの金髪は赤茶けた色に変わり、濃い藍色のだった瞳は黒くなっていた。聞けば、それは勇者の魔法だという。手配書の人相書きから逃れるための一環だった。

「クロードとは兄弟ということにします」

アルの言葉に、リータはアルの横にいるクロードを改めて観察した。クロードは短く刈った赤みがかったブロンドと、黒い瞳をしている。ただ、顔立ちは全く似ていない。アルは憎たらしいほど整った顔立ちだったが、クロードは精悍で引き締まっているが、親しみやすい顔をしていた。

似た色をまとっていても、二人が兄弟というのには少し無理があるようにリータには思えた。

「リータの髪と瞳の色も変えます」

「私も？」

リータの声に、アルが微かに笑った。

「ええ。だから、スカーフを取って下さい」

リータは血と泥に汚れた修道服から、動きやすさを優先したシンブルな服装に着替えていた。旅人のシャツとズボンを身に着け、上着を羽織り、頭にはスカーフを巻き付けている。

傍らにいるクロードに一瞬目を向けて、リータはスカーフを外すことを少しだけためらった。しかし、彼女は大人しくスカーフを取った。

露わになったリータの髪を見て、クロードがわずかにぎよつとしたのを、彼女は見逃さなかった。クロードは咎めるような視線をアルに飛ばした。

分かっていた反応だった。彼女は内心ため息をついたが、そのことは決して顔には出さなかった。

言われるまま後ろでまとめていた髪を下ろす。胸まである長い黒髪がすっと落ちた。丸められて押さえつけられていたのに、その髪にはその名残すらない。真っ直ぐに伸びた黒いそれを、彼女は内心忌々しく思っていた。

「mgc CHG CLR hr brw ply brw」

リータの髪を撫でながら、アルが呪文を唱えていた。正直なところ、彼女は彼に触れられることに耐えられなかった。リータはわき上がる苛立ちと嫌悪感を押さえながら、詠唱が終わるのを待った。

傍らのクロードはしきりに意味ありげな視線をアルに送っていた。どうせ黒髪なんてやめておけという忠告でしょう？ そう思うならばつきりそう口にして、この人の暴走を止めてよ。友人で部下なんでしょう？ リータは心の中で毒づいた。

数秒の後、リータの黒髪は明るい茶色に変化した。今まで何をやっても簡単には色を変えてくれなかった髪が、あっさり別の色をまとっている。

自分のものとは思えない髪を眺めながら、彼女は世界の理不尽さを一人噛みしめていた。

「見て下さい、湖が見えてきましたよ」

アルの言葉に、リータはハツとなった。前方の木陰からキラキラと光るものが見えた。

やがて木立を抜けると、目の前には青い水をたたえた大きな湖が広がっていた。

この湖は黒い森の中間あたりに存在する。森に囲まれた湖はとても静かで、この世のものとも知れぬ美しさを秘めていた。

馬を止めてしばし辺りの光景を眺めていた三人だったが、そのうちクロードが口を開いた。

「そろそろ休まないか？ もう大分来たし、追っ手はまだ大丈夫だろう。」

「そうだな。どこか休める場所を見つけたら食事しよう。」
リータをちらりと見て、アルが返事をした。

三人は湖のほとりに座り込んで軽い昼食を取り始めた。馬たちも疲れを癒すように水を飲んでいいる。

アルやクロードは二人で地図を見ながら何か話していた。慣れない乗馬に疲れているのだろう。リータは二人には構わず、その絵画のような景色を飽きることなく眺めていた。

「これからどこへ行くつもりなのですか？」

男二人が一息ついたところを見計らって、リータはそつと口を開いた。

「バスカヴィルへ。」

ここを通るならそれしかないだろう。半ば予想していたアルの言葉を、リータはうんざりして聞いた。

大陸南部の新興国バスカヴィル。魔王や戦争により土地を追われた人々が、大陸の南の海岸線と島々をつなげて作り上げた商業都市だ。主要な産業は漁業であったが、近年になって海運によりめざましい成長を遂げていた。

「国境を破る気ですか？」

バルデイもカルムも、バスカヴィルとの人間の行き来を制限していた。それはかつてこの国が貧しかった頃、大飢饉により困窮した人々が多数北側に流れ込み、大問題になったことがあるからだ。

バスカヴィルがそれなり国家になった後も、国境は商人など許可を得た一部の人々以外は通れないはずだ。もう犯罪はたくさんだ。リータは内心呟く。

「あてがあるんだ。心配しなくても大丈夫だよ」

クロードが笑いながら言った。しかし、リータの顔は晴れない。

「……本当に、あのような信仰の薄い地へ？」

バスカヴィルはリータにとって好ましい国ではなかった。それは、この国の宗教事情による。

バスカヴィルの首都アスキスはその昔、流れ者が最後に辿り着く場所であり、女神の見捨てた悪徳の町として知られていた。そんな成り立ちもあって、この国では他の国に比べて教会の数が少なく、一般に国民の信仰心も薄いと言われていた。

バスカヴィルが国家として整備された現在、アスキスは大陸でも有数の都市として知られている。一応教会は建っているが、バルデイヤカルムに比べれば規模は圧倒的に小さい。そのような土地に行くことに、リータは強い不安感を抱いていた。

彼女の様子を見て、アルが優しい顔で語りかけた。

「新しくどこかへ行く時は、誰しも不安に思うものです。あなたならどこでもうまくやっていけますよ」

その見当違いな言葉に、リータはどう返して良いか分からず、黙ってアルを見つめた。アルはリータの視線に薄笑みを浮かべた。

「そろそろ行きましようか」

アルの言葉にクロードがうなづいて立ち上がった。二人は少し離れた場所にいた馬の側で立ち止まり、また何か話し合っていた。リータもゆっくりと立ち上がって、重い足取りで二人に続いた。

9 少女と魔獣

?? 奇妙だ。

少女は森の中を満たしている奇妙な気配に困惑していた。一見、森の中はいつも通り静かで穏やかだった。見回してもいつもと違うものは見当たらないし、上を見上げれば枝葉の隙間から柔らかな光と青空が見えた。

ふと、少女は微かな足音と人の話し声を聞いた。

?? 人が来る。

道の先から聞こえてくる物音を敏感に察知し、少女は木陰に隠れた。息を潜めて様子を窺うと、それは剣を帯びた物々しい男達的一段だった。彼らは獵師と思しき男の先導で、森の奥へ進んでいった。

彼らの気配が消えた後、ふと少女はあることに気づいた。森の中に生き物の気配がないのだ。いつもならさえずっている小鳥たちの声がしない。足下の茂みの中で動き回っているネズミやウサギといった、小動物たちの気配も感じない。

まるで何かに怯えているようだと思っただ。何が原因のなのかは分からないが、森の中で何かが起こっているのは明白だった。そして、いつもはほとんど見かけないタイプの人間が、多数森の中に入り込んでいる。

こんな人里近いところまで来るべきではなかったと、少女は後悔した。用は済んだのだから早く戻ろう。彼女は帰り道を急いだ。

不意に、少女は生臭い匂いを捕らえた。獣の匂いだ。彼女はその不快な匂いに顔をしかめた。そつと周囲を見回すが、匂いの主は見当たらない。彼女はできるだけ自分の気配を消して、いつも以上に慎重に森を進んだ。しかし、どれだけ歩いてても、その気配は彼女から離れてくれない。

?? 困ったな。ここじゃどうしようもない。

少女は自分の不運を呪った。とにかく急ごう。そう思って彼女は湖へと通じる道を早足で進んだ。

リータ達三人は、湖に沿って西に向かって歩いていった。青く輝く湖面は鏡のように森の木々を映していて、神秘的な雰囲気たたえていた。

先に行くクロードは、ちらりと後ろを振り返ってアルとリータの様子を観察した。

二人の様子はぎこちないものだった。会話をしている様子もない。特にリータは手綱を握りしめ、背後にいる男の存在に彼女は身を固くしていた。その目は無表情に湖を見つめ、彼女は自分の殻に閉じこもっているように見えた。

前途多難だ、クロードは一人ため息をついた。一つ増えた頭痛の種に、彼はこめかみを押さえた。

アルには幸せになって欲しい。そうクロードは願っている。彼の家はアルの家に代々仕えている。また、彼の母親はアルの乳母でもあった。

クロードは子供の頃からずっとアルを見守ってきた。彼にとって、アルは弟のような存在だった。その弟が多く苦勞と犠牲の果てによりやく掴もうとした願いを、クロードは何とか成就させてやりたいと思っていた。

ただ、一方でリータに対する同情心も芽生えていた。仲間や顔見知りを目の前で殺された拳げ句、その原因となった男にさらわれて、逃亡を余儀なくされている女。彼女の表情からは混乱と憔悴ぶりが窺われた。

ずっと前に別れたきりの幼なじみに突然求婚され、その男が原因

で村を襲われ、挙げ句に犯罪者にされてしまった彼女。リータにとってこれは降って沸いた悪夢に過ぎないだろうとクロードは思う。大騒ぎして暴れたとしても何の不思議もない。

だが、リータは一時的に怒りこそ露わにしたものの、事態を把握した後は大人しく彼らについてきた。相手が『勇者』だからなのかもしれないが、不承不承ながらも彼らに従う彼女に、クロードは内心評価していた。

しかしその一方で、クロードはリータを警戒してもいた。今後、彼女は彼らの目を盗んで教会と接触しようとするだろう。今回の一件に女神教会が関わっていた可能性は高い。アルの身の安全を考えれば、それはどうしても避けたい事態だった。

リータがアルを好いているなら、そんなことは起こらないだろう。しかし、彼女がアルの恋人ではないと知り、クロードは彼女の裏切りを想定せざるを得なくなった。そして最悪の場合は、自分が手を下すしかない、そう彼は考えていた。

そんなことにならなければ良いが。クロードは密かに祈った。

湖の西端まで来たところで、アルはふと何かを感じて立ち止まった。それに気づいたクロードも馬を止めた。

「どうした？」

クロードは声を張り上げた。アルは口元に手をやってから、そつと右手の森を指さした。

三人は森の方に耳を澄ました。ガサガサと、微かに何か近づいてくるような物音がした。男二人は顔を見合わせると、馬を下り、武器を手にした。馬は隠しようがないので、少し離れた場所に待機させた。そして、三人は少し離れた森の茂みに入り、身を隠した。

音が近づいてくる。それは誰かが走ってくる音だった。

「追っ手か？」

「さあな」

男二人が短く会話を交わす。三人は息を潜めて、音の主が現れるのを待った。

ガサガサという音は、もうすぐ近くまで迫っていた。緊張しながら音の先に目を向けていると、やがて一つの影が姿を現した。

影は小さく、どう見ても追っ手の者ではなかった。

「子供？」

その姿に、リータはホツとして思わず声を上げた。肩で息をしていた影は、リータの声に驚いたのか、三人が隠れている方へと目を向けた。頭からすっぽりとフードを被っていて、その顔は見えなかった。

「馬鹿、喋るな。子供だからって油断するな」

クロードがリータに囁いた。彼女はハツとして視線を落とした。

影は彼らのいる茂みを凝視していた。しかし、やがて何かを思い出したように、自分が来た方向に目を向けた。

「何か来た」

アルが呟く。近づいてくる音は、子供のものだけではなかった。

先ほどよりも豪快な音を立てて、何か

近づいていた。子供は慌てたように駆けだし、更に南へと向かって行く。

「ガオオオオッ！」

突然、獣の音が響いた。先ほど子供が現れた茂みから、大きな影が躍り出た。獣は茂みから出たところであったん立ち止まり、再度威嚇するようにうなり声をあげた。

「……魔獣だ」

アルの呟きに、リータは凍り付いた。獣はイノシシを二回りほど大きくしたような姿で、口からは鋭い牙が覗いていた。

「ひっ！」

子供は振り向いて、悲鳴をあげた。獣の目は血走り、目の前にい

る獲物に完全に狙いをつけていた。子供は獣と目を合わせたまま動けないようだった。

「危ない！ 早く逃げて！」

その様子を見て、リータは反射的に叫んでいた。男二人が押さえる間もなく、彼女は茂みから飛び出した。獣が彼女の方を向いた。

「早く逃げて！」

リータは子供に向かって再度叫んだ。獣の威嚇が、今度は彼女に向かつて発せられた。その恐ろしさに足がすくむ。だが、恐怖を必死に押さえて、彼女は更に叫んだ。

「こつちよ！ 化け物！」

獣がリータの方に向かってきた。その速度はとても速く、人の足で逃げ切れるものではなかった。獣の血走った目が、彼女をにらみ付けていた。もうダメだ。そう悟ったリータは目をつぶって、その瞬間を待った。

衝撃は、なぜか正面ではなく右から来た。リータは突き飛ばされて、草地に転がった。

「ギヤアアア！」

魔獣の悲痛な声が辺りに響いた。リータが恐る恐る目を開けると、すぐ目の前に先ほどの獣が倒れていた。

獣の首筋はクロードの槍によって刺し貫かれていた。彼が槍を抜くと、獣の体からは大量の血が吹き出した。まだピクピクと動いていた獣の胴体を、クロードはもう一度刺した。今度こそ、魔獣は動かなくなった。

「大丈夫ですか？」

横から声をかけられてリータが振り向くと、そこにはアルが立っていた。埃まみれの彼の姿に、リータは自分がアルによって助けられたことに気づいた。

「……大丈夫です。ありがとうございました」

リータが礼を言うと、アルはそっと手を差しだした。一瞬ためらったが、彼女は素直に手を借りて立ち上がった。足がふらついたが、彼女は何とかこらえた。先ほどの恐怖の余韻で、彼女の頭は呆然としていた。

「二人とも平気か？」

険しい顔のクロードが、二人に声をかけた。二人が頷くと、クロードは厳しい表情をリータに向けて言った。

「何であんなことを」

それはリータへの非難の言葉だった。

「子供や弱者を守ることは、私たちの義務です」

リータの反論に、クロードが呆れた声で返す。

「自分の身を犠牲にしてもか？」

「そうです。聖典にもそう書かれています」

「なら、他人をそれに巻き込むな」

「巻き込んでなどいません」

「結局俺があれを倒したんだよ？ 君が危ない目に遭いそうになっ

たら、俺らは君を助けないといけない」

「でも……」

「そのくらいにしておけ、クロード」

リータは反論しようとしたが、その言葉はアルに遮られた。アルはリータの顔をのぞき込んで言った。

「私はあなたを守ります。でも、自分から危険に飛び込むような真似は、今は止めて下さい」

「あなたは勇者でしょ？ どうして……」

そう言いかけて、彼女は言葉を止めた。視界の端に、先ほどの子供の姿が見えたからだ。リータの視線に、男二人も傍らの子供に目を向けた。

子供はいつの間にか彼らの側まで来ており、所在なげに佇んでいる

た。子供の顔はすっぱりとフードで隠れていて、表情も分からない。「大丈夫？ 怪我はない？」

リータはかがんで、子供に声をかけた。子供の頭がごくんと一回縦に振れた。

「一人？ お父さんかお母さんは？」

子供の頭は横に振られた。こんなところに子供が一人？ リータは不思議に思っ、この子をどうするべきか思案していた。

「……助けてくれてありがとう」

不意に、子供が声を出した。その高く澄んだ声だった。もしかして女の子？ リータは疑問が疑問に思っていると、子供は突然アルを指さして言った。

「あなたは剣の担い手？」

一瞬何のことか分からなかったが、リータはすぐにそれが古い文献における勇者の異名であることを思い出した。

「そっだよ」

アルが返事を返した。その顔は微笑んでいたが、瞳には訝しげな色が滲んでいた。

「ならば覚えていて。私たちは今でも約定を守っているから」

そう言い放つと、子供は身を翻して南の方へと走って行った。止めようとしたリータだったが、身を返した瞬間にフードから覗いた瞳に目を奪われ、声をかけそびれてしまった。子供の姿はあっという間に森の中に消えた。

「何だったんだ、あれ？」

クロードが呟いた。

「森の民……」

リータは呆然として言った言葉に、二人も驚いたような声を上げた。

「本当か？」

「はい、あの子、赤い目をしていました」

黒い森の最深部に住む、森の民。彼らは外界と交わることがなく、その実態はほとんど知られていなかった。わずかに伝わるころころによると、彼らは皆赤い目を持ち、非常に美しい外見をしているという。また、彼らは長命で、独特の魔法を使うという。

「……約定と言っていたな」

アルの言葉に、リータは彼らについて重要なことを、もう一つ思い出した。

『約定破り』それは森の民についたもう一つの異名だった。彼らはかつて魔王討伐に力を貸していた。しかし、ある時から彼らはその要請を拒むようになった。以降、彼らは約定破りと罵られる対象になった。

しばしの間、子供が消えた方を見つめていた三人だったが、やがてアルが口を開いた。

「……そろそろ行きましょう」

「そうだな……そうだ、あれはどうする？」

クロードは倒れている魔獣に視線をやった。

「放っておけ、今は先に進むべきだ」

「そうだな」

クロードは隠れていた馬を連れ出して来た。彼らは森の中を西に進む道へと足を踏み入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6013w/>

勇者に女神の祝福を

2011年10月17日03時59分発行